

## 江戸の沽券図について

A Study of the *Koken-zu* of Edo  
IWARUCHI Reiji

岩淵令治

## はじめに

本共同研究で対象とした堺大絵図は、朝尾直弘によれば、堺の都市としての経済的地位が衰退し、都市行政が再編成される過程で作成されたものである。<sup>(1)</sup>すでに先行して堺の「惣絵図」が存在していたことから、堺大絵図は一七世紀後半の都市社会の変容に伴って作成された、いわば第二段階の都市全域図といえるであろう。朝尾の分析は多岐にわたるが、町屋敷については奥行の表記が始まることに注目し、その後「水帳」の作成と坪高（面積）による経費負担が行われることから、それまでの地子銀高や軒役による町入用負担からの転換の過程を読み取っている。

一方、堺と同じ幕府直轄都市である江戸においては、すでに玉井哲雄が明らかにしているように<sup>(2)</sup>、江戸の各町について、宝永七〜正徳元（一七〇一〜一）年と寛保四・延享元（一七四四）年の二度にわたり、沽券図という絵図が作成された（以下、正徳沽券図、延享沽券図とそれぞれ表記する）。この沽券図は、町奉行所が町屋敷の地価を掌握するため

に、各町の名主に作成させた絵図であり、各町の町屋敷の地主・家守、間口・奥行・坪数、沽券高（地価）、小間高（間口一間あたりの沽券高）が記されている。その記載内容は、沽券高と小間高を除けば、堺大絵図の書式と同様である。

玉井は正徳沽券図に先行して、すでに万治年間に町々の間数表示を主な内容とする町方絵図が作成され、元禄年間に至って個々の町屋敷の間数を明示した間数絵図が作成され、それに沽券金・小間高が別に調べられてつけ加えられ、沽券絵図の原型が成立していたことを明らかにしている。そして、この元禄期の間数絵図と沽券金・小間高を同時に記載する形式が整えられたのが、正徳沽券図だとしている。

江戸の元禄期の間数絵図は未発見であるため、同じく幕府直轄都市である堺について作成された堺大絵図との直接の系譜関係は不明である。また、堺においては、営業実績をもとにした地子銀と軒役から、経済力の低下に伴って単なる土地保有の広狭である坪高が基準となり、「都市の農村化」を遂げた朝尾が評したのに対して、江戸の場合は早くから

軒役とともに間口の広狭が基本であった。中世貿易商業都市に淵源を持つ堺と新興都市江戸の盛衰の方向は、対照的であった。「三ヶ津」という表象が、京・大坂・堺から京・大坂・江戸へと代わるのも元禄期のことである。<sup>(3)</sup>しかし、特権的町人が町政に深くかわる近世初期のありようが崩れ、町屋敷売買の促進によって町人社会が変容していく中で公的に作られた都市図という性格は共通するのではなからうか。そこで本稿では、いわば第二段階の公的な都市図の事例として、江戸の沽券図をとりあげたい。

さて、幕府が沽券図の作成を命じた時期は、本所・深川・山の手の町や寺社門前地を町奉行支配に編入する直前にあたっていることから、玉井は、沽券図が江戸町方再編成政策遂行のための基礎資料として重要な役割を果たしたと評価している。そして、沽券図は、町屋敷一筆ごとの寸法が記されていることから町の敷地割の復元に不可欠な史料である。さらに、周辺地域との地価の比較によって町の経済力を計ることができる。土地所持の状況や家守の展開の状況も判明することから、個別町、ひいては都市社会を分析する上での基礎史料といえる。そこで、近年、新たに沽券図が確認されてきていることを受けて、あらためて現存する沽券図の作成・伝来の再検討を検討した上で<sup>(4)</sup>、従来未紹介であった沽券図の個別分析を行い、史料批判と周辺町との地価(沽券高)の比較、土地所持状況等の町の社会構造について検討し<sup>(5)</sup>、最後に堺大絵図との若干の比較も行いたい。具体的に検討するのは、中心部の日本橋南地域(「万町沽券図控」)<sup>(6)</sup>、東海道筋の両側町(「芝神明町旧図」)<sup>(7)</sup>、城南の麻布(「麻布本村町沽券図」)<sup>(8)</sup>、そして、城北の日光御成道沿いの場末の町(「駒込追分町・同九軒屋鋪・同丸山新町・同片町沽券図」)<sup>(9)</sup>である。

# ① 現存する沽券図の全容

すでに沽券図の集成や史料批判はなされている。<sup>(9)</sup>玉井は、「現存して

いる沽券図は、家守印の有無などから、正徳、又は延享の時点で作成され町年寄を通して町奉行所に提出された正式のもの、及びおそらく町名主の手に残された控え、又はその写しが何らかの経路を経て残ったものと大きく分けて二系統に分かれる」と指摘している。<sup>(10)</sup>本節では、この経緯をより詳細にみていきたい。以下、とくに現存する「延享沽券図」の記載内容について、押印・裏書文言に注目しながら再検討しておきたい。

表1には、管見の限り現存する沽券図をあげた。<sup>(11)</sup>現存する六四点のうち、一一点をのぞき、すべて日本橋・京橋のもので、名主番組では一・二・四・七番組のものであった。そして、「正徳沽券図」(Ⅰ)は後の写しも含めて九点(堺町ほか・通一丁目・通二丁目・木挽町三・七丁目・南鞘町ほか・佃島・二葉町・兼房町・芝神明町)にすぎず、作成時期の異なる五点(Ⅲ)(新乗物町ほか(「天保十五(一八四四)年」、通一丁目(「天明七」寛政四(一七八七)九二」年)、南小田原町(「文政二(一八一九)年」、本八丁堀一・五丁目ほか(「嘉永三(一八五〇)年」、今戸(「天保一一年」、高輪南町代地(「安政二(一八五五)年」)を除くと、ほとんどは「延享沽券図」とその写し(Ⅳ)であった。なお、年欠のものうち、田所町と長谷川町は小間高記載がなく、鉄炮町と小伝馬町一丁目・三丁目・通油町・通塩町・小伝馬上町の二点については、沽券金額・小間高とも記載がない。

「正徳沽券図」・「延享沽券図」の作成の経緯についてはすでに玉井が明らかにしているが、その後の新出史料によって補足しておきたい。

「正徳沽券図」は、宝永七(一七一〇)年二月二三日に「町入用御改絵図帳面」とともに提出が命じられた。<sup>(13)</sup>以下は、二葉町沽券図の裏書である(以下、傍線部筆者)。<sup>(14)</sup>

宝永七庚寅年惣町中絵図被仰付候二付、町内絵図同七月廿九日被仰渡候処、十一月二日二如斯絵図并間数帳一冊・町内諸高入用帳一冊・店賃付之帳一冊三冊納申候、尤帳面之扣別紙二御座候

宝永七庚寅年十一月

番衆 磯貝藤兵衛殿・稲沢弥一兵衛殿・中村次郎右衛門殿 御三人  
立合御改申候

町御奉行 丹羽遠江守様・松野壱岐守様・坪内能登守様

宝永七年庚寅十一月十九日

月行事 市右衛門  
名主 甚次郎

これによれば、十一月二日に「絵図并間数帳一冊・町内諸高入用帳壹冊・店賃付之帳壹冊並三冊納申候」とあり、「番衆 磯貝藤兵衛・稲沢弥太兵衛・中村次郎右衛門」が「立合」って改め、町奉行に提出されている。「番衆」とは、二月の町触で「掛り」とされた各町奉行所の与力である。「正徳沽券図」の作成・提出の経緯については不明な点が多いが、担当役人の改めの上で、「間数帳」や「町内諸高入用帳」・「店賃付之帳」各一冊とともに町奉行所に提出されたことがわかる。

一方、「延享沽券図」の提出が最初に命じられたのは、寛保三(一七四三)年二月一〇日であり、翌年二月五日には、以下の文言が伝えられた。<sup>(15)</sup>

亥十二月十日

奈良屋二而町々名主<sup>江</sup>被申渡

一 正徳年中差出候町々沽券絵図、年久敷儀二而損候間、此度右絵図相改、来子二月迄二差出候様被申渡候

此度書上候絵図面沽券之儀ハ、凡當時町並之売買之積りを以、平均二書上申候、銘々地主共所持仕候沽券証文金高ハ、慶長金・元禄金・乾金・享保金入交有之、時々売主買主之相対二而高下御座候二付、絵図面金高とハ少々相違二御座候、以上

年号月日

何町 月行事 誰  
名主 誰

佃島の沽券絵図には、「延享元甲子年三月廿一日奈良屋御役所<sup>江</sup>納ル」とあり、さらに「此絵図面奥書之儀奈良屋御役所々下書被遣候二付町中一統之奥書二而御座候」とされている。提出する絵図には、この傍線部の「此度」以下の文言と町役人の署名・捺印がなされたのである(以下文言Aとする)。また、拝領屋敷のある町の場合は、「以上」の後にさらに「尤拝領屋敷沽券之儀<sup>者</sup>其場所之善悪并隣町売沽券之直段を見合書上申候」という文言が付された(以下 文言Bとする)。そして、沽券図は、町年寄に提出されたのである。つまり、提出した沽券図の正本には、居付地主ないし家守と名主すべての押印のみならず、上記の文言AないしBが記されていたのである。

この点に留意して、現存する「延享沽券図」とその写(Ⅱ)三五点をみてみると、以下の分類が可能である。

- 1 すべての条件を備えているもの。居付地主与兵衛の印のみを欠く本八丁堀一〜五丁目も加えると、一三点となる。
- 2 居付地主ないし家守の捺印と文言A・Bがあるが、名主の印鑑がないもの(八点)。
- 3 居付地主ないし家守の一部および名主の捺印を欠き、文言A・Bがあるもの(二点)。
- 4 居付地主ないし家守の捺印があり、文言A・Bを欠くもの(二点)。
- 5 捺印を欠き、文言A・Bのあるもの(八点)。
- 6 すべての欠くもの(二点)。

このうち正本の可能性がある沽券図は1であり、約三分の一にすぎないことがわかる。一方、5・6に該当するものは、地主の写であることが多い。残る2・3・4、すなわち居付地主ないし家守の捺印があつて名主の印のないものは、町の側の控である可能性が高い。そして、収録範囲についてみると、1・2は複数の町を収録し、一枚ないし二枚で各名主の支配町が網羅されているのに対して、3〜5は深川扇町ほか

表1 現存沽券図一覧

地域	区分	町名	年号	番組・名主・[未収載の町]	家守印	名主印	裏書文言	出典・所蔵
日本橋北	II 1	大伝馬町一・二丁目、通旅籠町、堀留町一・二丁目	寛保4(1744)	①(馬込)「勘解由」[別図あり、伊勢町欠]	○	○	A	区史
	II 1	大伝馬塩町・阿部友之進拝借地	寛保4(1744)	①(馬込)「勘解由」[別図あり、伊勢町欠]	○	○	A	区史
	II 2	小網町一・二丁目、小網町一丁目横町・甚左衛門町	寛保4(1744)	①(普勝伊兵衛)	○	×	A	区史
	II 5	小舟町一〜三丁目	寛保4(1744)	①(小沢)「太郎兵衛」[本舟町、長浜町一・二丁目欠]	×	×	B	区史
	IIか(註1)	小舟町一〜三丁目(「下舟町三丁分絵図」)		①(小沢太郎兵衛)[本舟町、長浜町一・二丁目欠]	○	×	×(註2)	三井文庫
		小舟町一〜三丁目(「小舟町三丁分絵図」)		①(小沢太郎兵衛)[本舟町、長浜町一・二丁目欠]	×	×	—	三井文庫
		小舟町一〜三丁目(「小舟町沽券絵図」)		①(小沢)「太郎兵衛」[本舟町、長浜町一・二丁目欠 安永9(1780)年の写]	×	×	(註3)	三井文庫
	II 5	葺屋町	寛保4(1744)	②(山口)「庄左衛門」	×	×	A	区史
	I写か(註4)	堺町・同横町・岩代町・新和泉町北側・堀江六軒町新道	なし(宝永7(1710)の写しか)	②(大塚治郎兵衛)[別図あり]	×	×	—	区史
	II 3	堺町・同横町・岩代町・新和泉町北側・堀江六軒町新道	寛保4(1744)	②(大塚)「治郎兵衛」[別図あり]	△	△	A	区史
	II 1	松島町	寛保4(1744)	②(大塚)「治郎兵衛」[別図あり]	○	○	別文言(註5)	区史
	II 1	高砂町・難波町・同裏河岸・住吉町・同裏河岸・元大坂町・新和泉町南側	寛保4(1744)	②(渡辺庄右衛門)	○	○	B	区史
	II 2	村松町・若松町・久松町	寛保4(1744)	②(村松)「源六」[別図あり]	○	×	B	東京都公文書館
		富沢町	なし	②(村松源六)[別図あり]	○	×	×	区史
	II 5	横山町二丁目	延享元(1744)	②(三戸見)「太郎兵衛」[明治2年地主の写]	書印	×	B	東京都立中央図書館
	III	新乗物町・長五郎屋敷・庄助屋敷	天保13(1842)	②(福島吉兵衛)	○	—	—	区史
		鉄炮町	なし	①(砥惣八郎)	×	×	×	区史
		堀江町一〜四丁目・新材木町	なし	①(山川吉左衛門)	○	×	×	区史
		田所町	なし	②(田所平蔵)[別図あり 弥兵衛町・橘町四丁目欠]	○	×	×	区史
		長谷川町	なし	②(田所平蔵)[別図あり 弥兵衛町・橘町四丁目欠]	△	×	×	区史
		小伝馬町一〜三丁目、通油町、通塩町、小伝馬上町	なし	②(宮辺又四郎)[元岩井町三丁分・柳原岩井町・道寿屋敷・亀井町欠]	×	×	×	区史
		小伝馬町一丁目他	なし		×	×	×	旧幕 819-113
日本橋南	I	通一丁目	宝永7(1710)	④(樽屋藤次郎 [地主の写])	×	×	×	伴伝兵衛家文書
	II 6	通一丁目	延享元(1744)	④(樽屋藤次郎 [地主の写])	×	×	×	伴伝兵衛家文書
	III	通一丁目	天明7(1787)〜寛政4(1792)	④(樽屋藤次郎 [地主の写])	×	×	×	大村家文書(国立史料館)
	I	通二丁目	宝永7(1710)	④(樽屋藤次郎 [地主の写])	×	×	×	柳屋外池家
	II 6	通二丁目	延享元(1744)	④(樽屋藤次郎 [地主の写])	×	×	×	註6
		通二丁目	寛保4(1744)	④(樽屋藤次郎)				国立国会図書館 YR8-99
	II 4	万町	延享元(1744)	④(曾我)小左衛門[青物町・日本橋際商売蔵地・元四日市欠]	○	×	別文言	慶應義塾大学三田メディアセンター
	I	南鞘町・南塗師町・松川町一〜二丁目・南伝馬町一〜三丁目・通三丁目代地	宝永7(1710)	⑤(高野)新右衛門	×	×	別文言	東京都立中央図書館
京橋・八丁堀	II 2	新肴町・弥左衛門町・槍屋町・銀座四丁目・元数寄屋町・尾張町新地・勘左衛門屋敷	延享元(1744)	⑥(長谷川)「伊左衛門」	○	△	B	旧幕 819-2 甲
	II 4	銀座一・二・三丁目	延享元(1744)	⑥(村田九右衛門・池谷権兵衛)[別図あり]	○	×	×	旧幕 819-2 乙
	II 1	銀座四丁目裏河岸・尾張町一丁目裏河岸・尾張町一丁目元地・同二丁目・元数寄屋町三丁目	寛保4(1744)	⑥(村田)「九右衛門」[別図あり]	○	○	A	旧幕 819-120
		尾張町二丁目裏河岸・竹川町裏河岸	寛保4(1744)か?	⑥(村田九右衛門)[別図あり]	○	×	×	旧幕 819-121
	II 1	元数寄屋町二丁目・西紺屋町	寛保4(1744)	⑥(塚部新太郎)「名主新太郎後見幸七」[本銀町土手欠]	○	○	B	旧幕 819-123
	II 2	筑波町・山城町・加賀町・丸屋町・寄合町・佐兵衛町・喜左衛門町・八官町	延享元(1744)	⑥(田中)「平四郎」	○	×	B	旧幕 819-125
	II 1	南紺屋町・弓町・休伯屋敷	延享元(1744)	⑥(渡辺)「源太郎」	○	○	A	旧幕 819-126



京橋・八丁堀	Ⅱ 1	南鍋町一・同二丁目・元数寄屋町四丁目・滝山町・守山町	延享元 (1744)	⑥ (長尾)「文蔵」	○	○	B	旧幕 819-144
	Ⅱ 2	京橋水谷町・同所金六町・南八丁堀一・二・三・五丁目・芝口金六町	延享元 (1744)	⑦ (渡部)「市蔵」[別図あり]・白魚屋敷拝借主「吉兵衛」	○	△	A	旧幕 819-170
	Ⅱ 1	岡崎町	延享元 (1744)	⑦ (岡崎)「十左衛門」[別図あり]	○	○	別文言	旧幕 819-20
		岡崎町・丹羽寿伴屋敷・岡崎町新屋敷	なし	(⑦岡崎十左衛門 [別図あり])	×	×	×	旧幕 819-19
	Ⅱ 3	本湊町	延享元 (1744)	⑦ (岡崎)「十左衛門」[別図あり]	△	×	A	旧幕 819-169
	Ⅱ 1'	本八丁堀一,二,三,四,五丁目	延享元 (1744)	⑦ (岡崎)「十左衛門」[別図あり]	△	○	A	旧幕 819-143
	Ⅱ 2	南小田原町一・二丁目	延享元 (1744)	⑦ (高野)「作左衛門」	○	×	A	旧幕 819-127
	Ⅱ 5	船松町一丁目, 二丁目	延享元 (1744)	⑦ (佃)「忠兵衛」[別図あり]	×	×	A	旧幕 819-142
	I	佃島	宝永 7 (1710)	(⑦佃忠兵衛) [別図あり]	○	—	—	京橋区史
	Ⅱ 5	佃島	延享元 (1744)	(⑦佃忠兵衛) [別図あり]	×	×	A	旧幕 819-116
	Ⅱ 1	幸町・永沢町・日比谷町・永島町・松屋町	延享元 (1744)	⑦永沢 (「嘉左衛門後見市蔵」)	○	○	A	旧幕 819-171
	I	木挽町三,四,五,六,七丁目	正徳元 (1711)	⑥ (尾崎)「七左衛門」[木挽町四丁目河岸, 善兵衛・兵助拝領地, 同所馬場守忠兵衛拝領地欠]	○	○	—	旧幕 819-175
	Ⅲ	南小田原町	文政 2 (1819)	⑦ (岡崎)「十左衛門」[別図あり]	×	×	×	旧幕 819-177
		南飯田町・上柳原町・南本郷町	なし	(⑦水田善三郎) [明石町・十軒町欠]	○	○	×	旧幕 819-128
	Ⅱ 1	八丁堀水谷町一丁目・黒船町代地・藩杭屋敷・金六町・水谷町一丁目火の見櫓請負地・水谷町二丁目・八丁堀金六町・北紺屋町・八丁堀請負地	延享元 (1744)	⑦ (富沢)「市蔵」[別図あり]・③ (木下)「九郎右衛門」[黒船町欠]・⑦ (富沢)「徳兵衛」	○	○	B	旧幕 819-114
	Ⅲ	本八丁堀一〜五丁目・五丁目横町・本湊町・船松町一丁目・同河岸	嘉永 3 (1850)	⑦ (岡崎)「十左衛門」[別図あり]	○	×	○	旧幕 819-115
その他	Ⅱ 2	(神田) 雉子町・三河町三丁目・四丁目・三丁目裏町・四丁目裏町・四軒町	延享元 (1744)	⑪ (斎藤)「市左衛門」	○	×	B	学習院大学図書館
	I	二葉町	宝永 7 (1710)	(⑧兼房甚次郎) [松田兼房町・芝口一丁目西側欠] [別図あり]	○	—	—	東京都江戸東京博物館
	I	松田兼房町	宝永 7 (1710)	(⑧兼房甚次郎) [断簡] [別図あり]	—	—	—	東京都江戸東京博物館
	I	芝神明町	宝永 8 (1711)	⑧ (植田)「孫右衛門」	×	×	署名のみ	東北大学附属図書館蔵狩野文庫
	Ⅱ 1	四谷伝馬町一〜四丁目, 四谷新伝馬町一丁目, 四谷塩町一〜三丁目	延享元 (1744) 年 4 月	⑮ (馬込勘解由の「下名主」寺内半四郎・高嶋孫右衛門)「半四郎・孫右衛門」	○	○	A	東京都江戸東京博物館
	Ⅱ 5	麻布本村町	延享元 (1744)	⑨ (嶋田)「又左衛門」	×	×	A	港区立港郷土資料館
	Ⅱ 2	駒込迫分町・同九軒屋舗・同丸山新町・同片町	延享元 (1744)	⑭ (山下)「八左衛門」	○	○	B	国立歴史民俗博物館
	Ⅱ 5	上野町一,二丁目	寛保 4 (1744)	⑬ (佐久間)「源八」[上野代地下谷大工屋敷欠]	×	×	A	東京都立中央図書館
	Ⅱ 5	深川扇町・茂森町・六万坪町・石川町・入船町・嶋田町・鶴歩町	寛保 4 (1744)	⑰ (平野)「甚四郎」[地主写し]	×	×	A	東京都江戸東京博物館
	Ⅲ	今戸	天保 11 (1840)	「名主市郎左衛門幼年ニ付後見松順」	○	○	別文言	東京国立博物館
	Ⅲ	高輪南町代地	安政 2 (1855)	「権左衛門」	○	×	—	旧幕 819-118

区分：Ⅰ = 正徳沽券図    Ⅱ = 延享沽券図 (1～6 の区分は本文参照)    Ⅲ = その他の時期    空欄 = 作成年記なし

番組・名主:「」は原史料の名主の署名の記載で、適宜寛保元 (1744) 年および延享 3 (1746) 年の町鑑 (加藤貴『江戸町鑑』一、東京堂出版、1989 年) より、苗字・名主番組の番号 (丸数字)・支配町のうち記載のない町を補った。また、同じ名主の支配町の沽券図がある場合は「別図あり」と記した。ただし、地主の写であることが判明している場合は、性格が異なるため、記載のない町は表記しなかった。

印・裏書文言:○印は捺印のあるもの、△は一部欠くもの、—は時期が異なるため存在しないことが想定されるもの、文言 A・B は本文参照。別文言とは A・B 以外の文言があることを示す。

出典の略記: 区史 = 『日本橋区史』(1937 年)、旧幕 = 国立国会図書館蔵旧幕府引継書

註 1 小舟町については、4 点の沽券図が現存しており、比較検討が必要であるが、今後の課題とした。

註 2 付箋で B の写ほかあり。

註 3 元治 2 (1865) 年 12 月の修復の文言あり。

註 4 寛保沽券図よりすべて沽券高は低額で居付地主も多いため、宝永沽券図と判断した。

註 5 すべて拝領屋敷で別文言

註 6 八木佐吉旧蔵 (『わが町の歩み 日本橋二丁目通町会商店会三十年史』日本橋二丁目通町会商店会、1978 年)

六カ町のものを除き、一町のみのもが多い。

残存する延享沽券図の性格を考える上で参考になるのが、以下の「万町沽券絵図控」の文言である。

一 宝永七寅年町々沽券絵図差上置候処、年久罷成損シ候ニ付、沽券等相改、当中迄ニ新規絵図差上候様ニ旧臘奈良屋市右衛門殿被仰渡候ニ付、此度支配中惣絵図相改差上候、尤此方ニ写雖有之、年を経入用之節虫喰<sup>者</sup>或<sup>者</sup>損失難斗、其節爲見合之、表書之通其町之絵図写シ相渡置候、惣入用之節<sup>者</sup>支配之町々小絵図町境之合紋継合候得<sup>者</sup>上ヶ絵図之通ニ成候もの也

延享元年甲子二月晦日 名主 小左衛門 印

作成者の「名主小左衛門」とは、万町・青物町・日本橋際商売蔵地・元四日市町の名主曾我小左衛門であり、同史料は延享元（二七四四）年二月晦日に、町年寄奈良屋の命を受けた曾我が提出した「支配中惣絵図」（「上ヶ絵図」の「写」（扨）を、用心のためにさらに町ごとに分割して控えて各町に渡したもの（「小絵図」）であることが判明する。こうした記載から考えて、1は「支配中惣絵図」の正本ないし名主の控であろう。2は新肴町ほか六ヶ町の絵図で拝領屋敷主の印鑑のみ書印となっており、また文言Bに「町内相談の上相定書上」が書き加えられていることから、名主宅におかれた控と考えられる。また、3・4は「小絵図」とほぼ対応する町ごとに作成された控とみてよいだろう。そして、5・6は、横山町二丁目のものが「役頭ニ有之御図帳之写」と記されているように、名主の提出絵図の控である「支配中惣絵図」もしくは小絵図を写したものと考えられよう。なお、すべての町について「小絵図」が作成されたかは不明であるが、居付地主・家守の捺印のある年記不明の田所町・長谷川町・富沢町の各図も万町の「小絵図」と同様の性格をもつ可能性があるだろう。

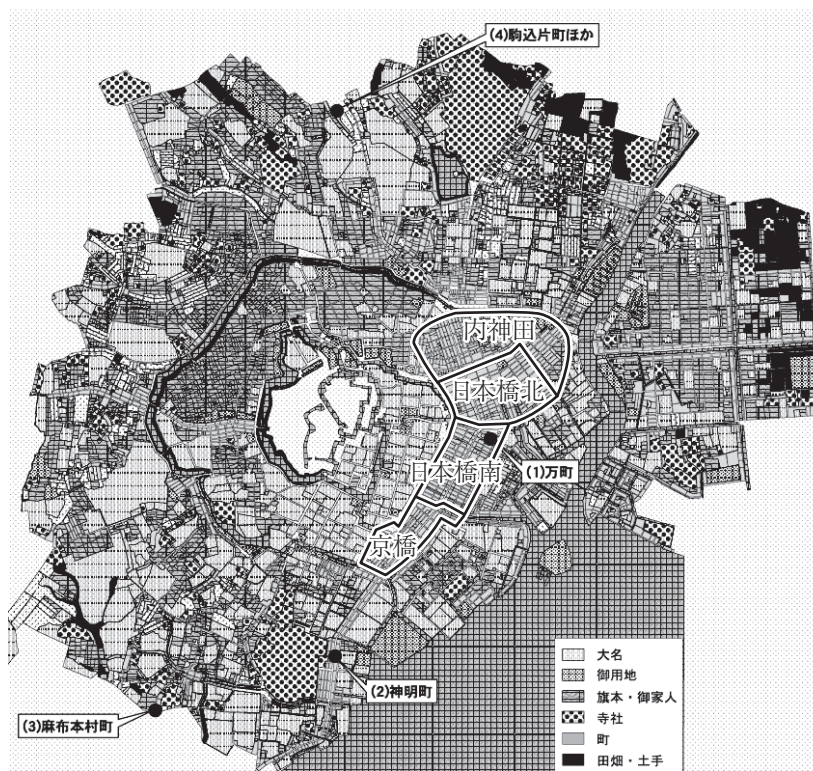


図1 本稿で検討する沽券図の対象場所（『江戸復原図』東京都、1990年より作成）

## ② 沽券図の個別分析

では、これまで未検討だった四点の沽券絵図を検討したい（図1）。

## 1 「万町沽券絵図控」（図3・4）

「万町沽券絵図控」は、七〇・五cm×六七・〇cmの彩色の絵図で、現状では八つ折りに折り畳まれ、現所蔵機関の表紙が付けられている。先述したように、史料の裏書の記載より、本史料は町奉行所に提出した延享沽券図の「写（扣）」を、用心のためにさらに町ごとに分割して控えて各町に渡したもの（「小絵図」）である。画面の縁には二ヶ所の記号があるが、これが他の「小絵図」と合わせるために用いられた「合紋」であろう。日本橋南地域については、他の古町である日本橋北地域・京橋地域と比べて沽券図が確認されていなかった。しかし、近年の江戸遺跡調査にもなっており、新たに沽券絵図が確認されてきている<sup>(17)</sup>。また、多くの町とは異なり、通一丁目・通二丁目については、正徳沽券図・延享沽券図の双方の写しが残っており、この間の地価の変動をみることもできる。すでに玉井によって、通一丁目・通二丁目の沽券図の比較が行われている<sup>(18)</sup>が、万町のデータも含めて検討したい。

図2には、通一丁目・二丁目、万町の小間高を示した。各屋敷の間口も考慮しなければならないが、さしあたって以下の点が指摘できよう。

1 各町内では角屋敷が最も高く、ついで新道に面した角屋敷が高額となっている。また、新道の町屋敷は低額である。

2 通一・二丁目については、日本橋から離れるほど小間高は下がり、また通一丁目南の角屋敷を除き、基本的には通りの東側の方が西側の方より高額である。また、七筆をのぞき、正徳沽券図から延享沽券図の間に、小間高は上昇している。上昇率については、通一丁目が一〇・五%、通二丁目が一一・三%と、通二丁目の方がやや高い。

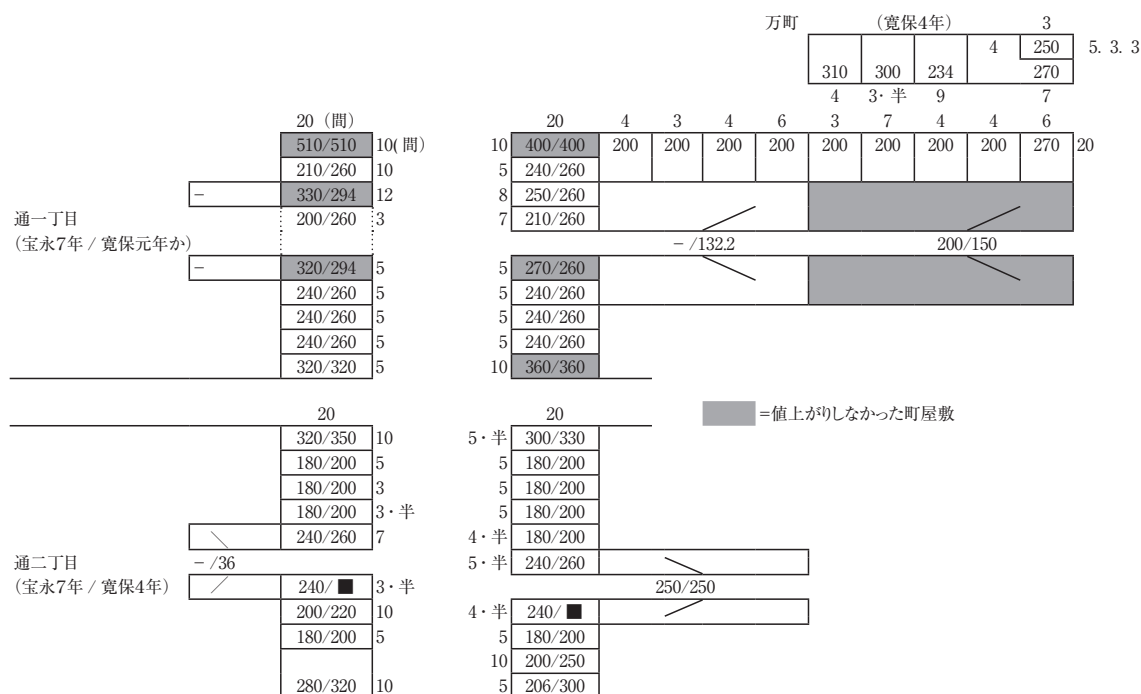


図2 万町・日本橋通一・二丁目の小間高（岩淵 2003b 年を一部改変）

出典 通一丁目：宝永沽券図・寛保沽券図とも伴家文書（東京都公文書館寄託文書）。

通二丁目：宝永沽券図＝柳屋外池家。

寛保沽券図＝『わが町のあゆみ 日本橋二丁目通町会商店会三十年史』（日本橋二丁目通町会商店会 1978 年）に所収。ともに『日本橋二丁目遺跡』（日本橋二丁目遺跡調査会 2001 年）に所収。（■は不読部分）

万町：寛保沽券図＝「万町沽券絵図控」（慶應義塾大学三田メディアセンター蔵幸田文庫）。





図3 「万町沽券絵図控」トレース図（『日本橋一丁目遺跡』日本橋一丁目遺跡調査会ほか、2000年より転載）

3 万町の小間高は、通二丁目の中屋敷と同額であり、東側の通りに面した角屋敷は通二丁目の新道に面した角屋敷とほぼ同額である。また、町内においては、不整形であるにもかかわらず、北側の町屋敷の方が高額である。

これらの事象の理由をすべて説明することはできないが、1は玉井が日本橋北地域や京橋地域の町の沽券図で指摘しているように、敷地の二面が道路に接するという角屋敷の利点が反映しているといえよう。また、2より、日本橋から離れるほど土地の評価が低くなるが、正徳沽券図から延享沽券図の間に通二丁目の小間高が上昇していることがうかがえる。そして、3より日本橋通りから一本東の道（日本橋南東中通）<sup>(19)</sup>に面した町の方が経済力が低く、この三町では、通二丁目↓通二丁目↓万町の順で小間高が下がっていることがうかがえよう。

土地所有者について見てみると、一四筆の町屋敷のうち、地主のみが記載される町屋敷は、町屋敷<sup>(10)</sup>の名主、町屋敷<sup>(11)</sup>の「家持 作兵衛」、<sup>(8)</sup>の「七兵衛」である（図2）。彼らは地主自身が居住する居付地主である。残る一一筆にはすべて町役と町屋敷経営を代行する家守がおかれており、隣接する町屋敷の居付地主が所持する<sup>(12)・⑦</sup>を除き、九筆は不在地主だったと考えられる。この中には、<sup>(1)・②</sup>と複数の町屋敷を所持する者も存在した。吉田伸之は、江戸の町では、居付の地主（家持）が一七世紀末より激減し、町屋敷で貸家経営（町屋敷経営）を行い、また資産としてこれを所持する不在地主が増加していくこと、これに対応して地主の代理人である家守が町制の実務を担う「家守の町中」が成立することを指摘している。<sup>(20)</sup>万町の成立時の地主は不詳であるが、遅くともこの延享沽券図の段階では、万町の多くの町屋敷では貸家経営が行われ、町制は



図4 「万町沽券絵図控」(慶應義塾大学三田メディアセンター蔵 図3に同じ)

「家守の町中」によって担われていたと推定される。

また、名主曾我小左衛門が北側の西角屋敷(⑩)に居住していることが注目される。この屋敷は、曾我の役宅であった。玉井が指摘しているように、店舗経営に有利な角屋敷には、町の有力者が住んでいることが多かった。したがって名主の居住という事態は十分に理解できる。吉田伸之によれば、江戸の古町では、当初各町に一人づつ名主が存在していた(「町の名主」)。しかし、その選出母体であった居付の地主(家持)が一七世紀末より激減していく中で町の名主も激減し、やがて近辺の名主の支配下に組み込まれ、名主も「支配名主」となる、と述べている。万町の場合、家持の不在化が進展するものの、町の名主が残ったとみることができよう。さらに、曾我は一八世紀には青物町・元四日市町も支配しているが、これは曾我の「支配名主」化と考えられよう。その後、曾我の役宅は、宝暦七(二七五七)年から明和元(一七六四)年の間に青物町に移転し、万町は寛政三(一七九一)年以降は日本橋の対岸にある品川町の名主竹口六左衛門の支配となっている。曾我はこの一八世紀後半に没落したと考えられる。

なお、沽券図が作成された時期やそれ以前の町の地主や住民については、地誌類のわずかな記載しか確認できない。『江戸鹿子』(元禄三(六九〇)年刊)は、「ぼうや」の項で「日本橋北万町」(⑩)～(⑫)か、「木履や」の項で「日本橋南万町」(①)～(⑨)かをあげている。また「日本橋南東中通」(日本橋通りに並行した南北の通り)の横町の一つとして万町をとりあげ、この通りの主な商家として「古道具・材木・煎茶・紙や・本や・古着・油や・花や」をあげている。<sup>(21)</sup>『国花万葉記』(元禄六年刊)では、万町は「日本橋南東中通」で同様の記載がなされるほか、「西河

岸通」の町としても登場し、この筋の商売として、「くれ木・砥石・棒屋・下り酒・あした・ほくり・瀬戸物・材木・大間屋」があげられている。<sup>(22)</sup>『諸国買物調方記』(元禄五年刊)では、「書林 物之本屋」で「万町横丁 角 万や清兵へ」、ほか「ぼう屋 日本橋北万町」・「ほくりあした 日本ばし万町」・「飛脚屋 万町大坂や茂兵衛」が確認できる。<sup>(23)</sup>また、『続江戸砂子温故名跡志』(享保二〇(一七三五)年刊)には「万町 日本橋のひがし取付。棒屋多し。」とある。<sup>(24)</sup>

以上から、沽券図が作成された頃の万町においては、とくに目立つ商売として、木の棒を取り扱う棒屋と履物関係の店(足駄・木履)があったことがうかがえる。<sup>(25)</sup>

## 2 「江戸芝神明町旧図」(図5・6)

芝神明町は、京橋地域の南側に位置する東海道沿いの両側町で、京間で設定された古町の一つであった。居住者は、幕末の『諸問屋名前帳』によれば、地本双紙問屋一人、同仮組三人、版木屋二人、小問物問屋二人、雛屋仮組一人、人宿二人、六組飛脚屋一人、炭薪仲買一人で、『八品商名前帳』によれば古着・質屋などのいわゆる八品商がのべ八人であった。書肆や出版、小問物関係が目立つのは、西面が江戸の一大繁華街であった芝神明社の門前「神明前」<sup>(26)</sup>の一角を構成していたためである。本図には「寶永八辛卯年四月十三日改古圖」とあることから、現存するものが少ない正徳沽券図の写と考えられる。

屋敷の外形については、二六筆のうち、表間口について八筆が「外延地」(E3・E6・E8・E12・W2・W10・W11・W13)、九筆が「内不足地」(E4・E9・E11・W3・W5・W6・W7・W9・W12)の注記がある。正徳沽券図以前に設定された敷地割をもとにあらためて屋敷寸法が測られたと推測される。同様の記載は、南鍋町ほかを記載した延享沽券図一点のみで、南鍋町壱・貳町目と瀧山町にしか「外

延地」は見られない。

東側は一二筆で、小間高は角屋鋪が一〇五両、中屋敷が八〇両、西側は一四筆で、角屋鋪が一二〇両・中屋敷が一〇〇両となっている。正徳沽券図段階の小間高で、日本橋の裏通りの延享沽券図段階の小間高とは同クラスとなっている。すでに、寛永一六(一六三九)年の沽券状によると東側表五間・裏行町並の町屋敷(E11か)が江戸小判一八〇両で売り渡されるなど、早くから売買がおこなわれていたことがうかがえる。<sup>(27)</sup>西側は両側に面し、先述したように西面が「神明前」の一角を構成していたため、東側よりも小間高が上がったと考えられる。

居付地主は東側が三筆、西側が八筆で、とくに東側で地主の不在化が進行している。不在地主には、内神田の橋本町二丁目(E1)、他国者(W10)地主京都知恩院門前)もみられるが、芝口町(E3・5)・柴井町(E6)・浜松町(E12)・源助町(W3)といった近辺の居住者が中心であった。また、また居付地主のうちE4・W1・W2と不在地主のW14は「式軒役」となっており、隣地の取得によって町屋敷を併合した可能性が高い。居付地主のうち、W8清兵衛(柳屋)はもとは泉州堺の鉄砲鍛冶で、家康の入国以前から住居し、「江戸地張元祖」の看板を掲げて代々「梅忠流」の煙管張を商売とした者であった。この土地は草分地主で「先祖清兵衛草分二而沽券地二相成候節御割付二而頂戴仕候地面」であり、この沽券図作成直後にあたる正徳年中に沽券金一三〇両で売却したものの、ひきつづき家守として居住し、文化八(一八一〇)年に三五〇両で買い戻したという。<sup>(28)</sup>

## 3 「麻布本村町沽券図」(図7・8・表3)

麻布本村町は、正徳三(一七一三)年に町奉行所支配に編入された町である。「町方書上」によれば、本村町の名はこの場に名主と村役人が居住して、諸役をつとめ、麻布の各町の年貢もとまりまとめた「元村」であっ

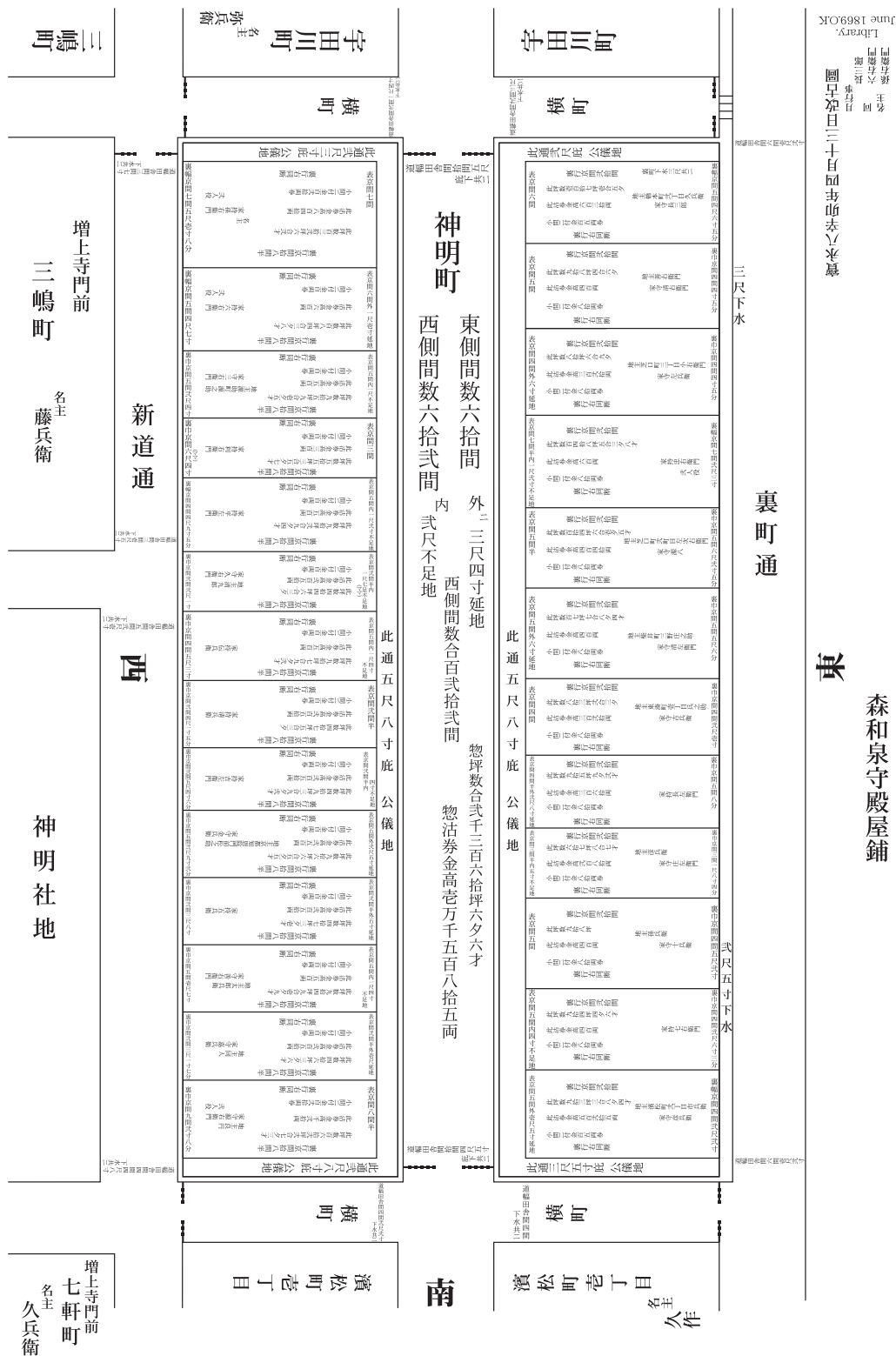


図5 「江戸芝神明町旧図」トレース図

表2 「江戸芝神明町旧図」(東北大学附属図書館蔵狩野文庫) 記載一覧(記号は図6に対応)

記号	間口・ほか記載	裏幅	裏行 (北側)	裏 (南側)	坪数	沽券金高	小間高	地主・家持	家守
E 1	表京間六間	裏幅京間五間四尺六寸五分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数老百拾七坪老合五夕	此沽券金高六百三拾兩	小間二付金百五兩券	地主橋本町式丁目久兵衛	家守長三郎
E 2	表京間五間	裏巾京間四間四寸五分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数九拾八坪四合六夕	此沽券金高四百兩	小間二付金八拾兩券	地主善右衛門	家守清右衛門
E 3	表京間四間外六寸延地	裏巾京間四間四寸五分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数八拾坪六合九夕	此沽券金高三百二拾兩	小間二付金八拾兩券	地主芝口町三丁目小右衛門	家守左兵衛
E 4	表京間七間半内一尺二寸不足地	裏巾京間七間式尺三寸	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数百四拾八坪五合三夕八才	此沽券金高六百兩	小間二付金八拾兩券	家持忠右衛門式人役	
E 5	表京間五間半	裏巾京間五間六尺式寸五分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数百拾四坪六合老夕五才	此沽券金高四百四拾兩	小間二付金八拾兩券	家持芝口町五丁目左次右衛門	家守源八
E 6	表京間五間外六寸延地	裏巾京間五間五尺六分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数百七坪七合八夕四才	此沽券金高四百兩	小間二付金八拾兩券	地主柴井町三野庄之助	家守清左衛門
E 7	表京間四間	裏巾京間四間式尺壹寸	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数八拾三坪式合三夕	此沽券金高三百式拾兩	小間二付金八拾兩券	地主東湊町壹丁目兵之助	家守吉兵衛
E 8	表京間四間半外式尺六寸延地	裏巾京間五間八分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数九拾五坪九夕式才	此沽券金高三百六拾兩	小間二付金八拾兩券	家持長左衛門	
E 9	表京間三間半内五寸不足地	裏巾京間三間一尺八寸四分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数六拾七坪八合七才	此沽券金高式百八拾兩	小間二付金八拾兩券	地主彦兵衛	家守庄左衛門
E 10	表京間五間	裏巾京間四間五尺式寸	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数九拾八坪	此沽券金高四百兩	小間二付金八拾兩券	地主孫兵衛	家守十兵衛
E 11	表京間五間内四寸不足地	裏巾京間四間式尺六寸三分	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数九拾四坪四夕六才	此沽券金高四百兩	小間二付金八拾兩券	家持七右衛門	
E 12	表京間五間外壹尺五寸延地	裏幅京間四間式尺式寸	裏行京間式拾間	裏行右同断	此坪数九拾三坪三合八夕四才	此沽券金高五百式拾五兩	小間二付金百五兩券	地主濱松町式丁目市兵衛	家守彦兵衛
W 1	表京間七間	裏幅京間七間五尺老寸八分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数百三拾式坪六合式才	此沽券金高八百四拾兩	小間二付金百式拾兩券	名主 家持孫右衛門 式人役	
W 2	表京間六間外一尺老寸延地	裏幅京間五間四尺七寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数百八坪四合三夕八才	此沽券金高六百兩	小間二付金百兩券	家持六右衛門 式人役	
W 3	表京間五間内一尺不足地	裏幅京間五間式尺四寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数九拾五坪九合老夕五才	此沽券金高五百兩	小間二付金百兩券	地主源助町源之助	家守三右衛門
W 4	表京間三間	裏巾京間六尺(ママ) 四寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数五拾五坪三合五夕七才	此沽券金高三百兩	小間二付金百兩券	家持利右衛門	
W 5	表京間五間内一尺式寸不足地	裏幅京間四間四尺九寸五分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数九拾坪式合九夕四才	此沽券金高五百兩	小間二付金百兩券	家持平左衛門	
W 6	表京間式間半内一尺七寸不足地	裏巾京間式間式尺一寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数四拾四坪六合三夕	此沽券金高式百五拾兩	小間二付金百兩券	地主清九郎	家守久右衛門
W 7	表京間五間内一尺四寸不足地	裏巾京間四間五尺三寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数九拾坪七合九夕式才	此沽券金高五百兩	小間二付金百兩券	家持伝兵衛	
W 8	表京間式間半	裏巾京間式間四尺一寸五分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数四拾七坪五合三夕	此沽券金高式百五拾兩	小間二付金百兩券	家持清兵衛	
W 9	表京間式間半内四寸不足地	裏巾京間式間五尺四寸六分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数四拾九坪三合九夕式才	此沽券金高式百五拾兩	小間二付金百兩券	家持吉左衛門	
W 10	表京間五間外式尺五寸延地	裏巾京間五間式尺九寸五分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数九拾六坪六合五夕四才	此沽券金高式五百兩	小間二付金百兩券	地主京都知恩院門前松之助	家守金兵衛
W 11	表京間式間半外五寸延地	裏巾京間式間三尺八寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数四拾七坪三夕老才	此沽券金高式百五拾兩	小間二付金百兩券	家持五兵衛	
W 12	表京間五間内一尺四寸不足地	裏巾京間五間壹尺七寸	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数九拾四坪九合老夕九才	此沽券金高五百兩	小間二付金百兩券	地主太郎兵衛	家守善右衛門
W 13	表京間式間半外壹尺延地	裏巾京間式間三尺一寸七分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数四拾六坪三夕六才	此沽券金高式百五拾兩	小間二付金百兩券	地主同人	家守嘉兵衛
W 14	表京間八間半	裏巾京間九間式寸八分	裏行京間拾八間半	裏行右同断	此坪数百六拾坪式坪合七夕三才	此沽券金高千式拾兩	小間二付金百式拾兩券	地主良円	家守源右衛門 式人役

- ① 寶永八辛卯年四月十三日改古圖 月行事 長三郎 同六右衛門 名主 孫右衛門
- ② Library June 1869.O.K
- ③ 道幅田舎間六間老尺式寸
- ④ 道幅田舎間式間三尺 下水共二
- ⑤ 道幅田舎間式間一尺六寸 下水共二
- ⑥ 此通式尺底 公儀地
- ⑦ 道幅田舎間拾間五尺 底下共二
- ⑧ 此通式尺三寸底 公儀地
- ⑨ 三尺下水
- ⑩ 此通五尺八寸底 公儀地
- ⑪ 式尺五寸下水
- ⑫ 道幅田舎間拾間四尺五寸 底下共二
- ⑬ 此通三尺五寸底 公儀地
- ⑭ 道幅田舎間六間老尺式寸
- ⑮ 道幅田舎間四間 下水共二
- ⑯ 道幅田舎間四間式尺式寸 下水共二
- ⑰ 道幅田舎間三間七寸 下水共二
- ⑱ 道幅田舎間三間老尺五寸 下水共二
- ⑲ 道幅田舎間五間式尺老寸 下水共二
- ⑳ 道幅田舎間四間四尺八寸 下水共二

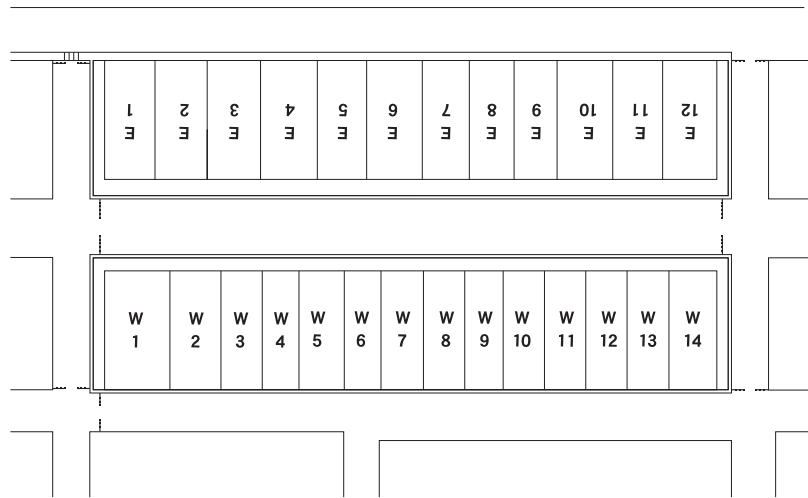


図6 「江戸芝神明町旧図」(概略図)



たことから「本村」と称し、町並化にあたって「本村町」と記すことにしたという。また、村内のうち五〇石が元和元（一六一五）年より天徳寺領、二八石七斗二升二合六タが大養寺領となり（年代不明）、これらも町奉行支配の町屋となった。幕末の『諸問屋名前帳』によれば、炭薪仲買一七人、春米屋一〇人、地廻り米穀問屋・脇店八ヶ所組米屋各一人、両替屋四人、紺屋二人、地掛蠟燭屋二人、六組飛脚屋一人が居住しており、計三八人のうち一六人は家持であった。また、『八品商名前帳』によれば八品商がのべ四七人居住し、うち二〇人が家持であった。とくに職種に特徴はないが、家持の中に下り物問屋が存在していない点で、典型的な場末の町のありようを示しているといえる。

本図は、延享沽券図の写で、記述の内容は当時のものである。<sup>(29)</sup> 前章で確認したように、現存が確認できる沽券図は約六〇点であり、いずれも江戸中心部の日本橋・京橋地域のものである。例外は神田地域（雉子町ほか五町）、江戸北部（上野町一・二丁目、今戸、駒込片町ほか）、江戸西部（四谷伝馬町ほか）、深川地域（深川扇町ほか六町）、江戸南部（二葉町、芝神明町、桜田兼房町、高縄南町代地）の計一〇点に限られる（前掲表1）。しかも場末の状況は不明であるため、稀少な事例といえよう。まず、次にあげたのは、本図のaの部分の記載である。

惣坪数壹万千百六拾五坪三合  
麻布本村町惣合 惣間口八百八拾五間壹尺四寸

沽券金六千八百式拾七両式分

此度書上候絵図面沽券之儀<sup>(凡脱)</sup>、<sup>(凡脱)</sup> 當時町並売買之積りを以、平均二書上申候、銘々地主共所持仕候沽券証文金高<sup>者</sup>、慶長金・元禄金・乾金・享保金入交り有之、<sup>(時々脱)</sup> 売主買主之相対二而高下御座候二付、絵図面金高とハ少々相違御座候、并坪数之儀間数とハ少々宛相違御座候得共、御 水帳面之通書上候、以上

延享元子年三月

麻布本村町 月行事

八郎兵衛

名主

又左衛門

基本的には先述したAの文言であり、作成者に印鑑がなく、また図内にもほぼ印鑑を欠いていることから、本図は冒頭で示した類型のⅡ5に該当する。注目されるのは、傍線部の追加文言で、図面の坪数と間数が矛盾する場合もあるが、水帳に従ったとしている。ここでは芝神明町でみたような、土地区画の変容が現れていることに注目しておきたい。ただし、記載で重視されたのは所持者と沽券高・小間高で、坪数は水帳に拠ったことがうかがえる。町奉行所にとっては、役負担と小間高の算出において、坪数より間口が重要だったことがあらためて確認できる。

なお、裏打に使用されていた紙も麻布本村町の沽券図で、年記はなかったが、屋敷割・地主・家守・沽券金などの記載が表面の沽券図とほぼ同じことから、表面の沽券図の写しまたは下書きと推測されている。<sup>(30)</sup>

図を子細にみると、写す際に情報が欠落したと思われる点が何点が見られる。まず、βの位置に、「此色寺院」「此色天徳寺領・大養寺領」の凡例があるが、実際には原図中の該当箇所には彩色はみられず、退色した痕跡もない。「町方書上」によれば、幕領（「代官所分」）は三町九畝拾歩、天徳寺分は二反三畝二九歩（図7の「天」）、大養寺分が八反八畝七分（図7の「大」）で、町としてはこの三領分からなるが、本図では幕領分の町屋敷しか記されていないことになる。また、表間口記載の欠落（87）、裏幅の記載の欠落（14、56）、「道幅」の寸法の欠落（21）、一六のグループ（後述）の範囲を示す記号の欠落（34、5）の片方、12の一部）、「地主」「家守」の欠落がみられる。印鑑については、59徳左衛門と60兵右衛門の張紙の上にみとめられるが、作成経緯との関係は不明である。また、20・21はおそらく3グループに属すと思われるが、合



図7「麻布本村町沽券図」トレース図

図8「麻布本村町沽券図」(港区立港郷土資料館蔵)

表3 「麻布本村町沽券図」(港区立港郷土資料館蔵) 記載一覧(記号は図7に対応 ■・□は虫損・カスレで不読部分)

記号	間口・ほか記載	裏幅	裏行(北側)	裏行(南側)	坪数	沽券金高	小間高	地主・家持(記号は本文参照)	家守
1	表田舎間九間老尺五寸	(記載なし)	裏行九間老尺五寸	同十間式尺	此坪数九十四坪	沽券金百八兩	小間二付拾貳(兩脱カ)券	地主 六左衛門*	家守 長右衛門
2	表田舎間六間	(記載なし)	裏行十間式尺	同十間五尺	此坪数五十四坪	沽券金七拾貳兩	小間二付拾貳兩券	家主 彦右衛門	
3	表田舎間八間四尺	(記載なし)	裏行十間五尺	同十間五尺八寸	此坪数九十老坪	沽券金百貳兩	小間二付拾貳兩券	地主 兵右衛門	家守 藤七
4	表田舎間七間	(記載なし)	裏行十五間三尺	同十六間四尺	此坪数九拾六坪	沽券金百拾貳兩	小間二付拾■(貳カ)兩券	地主 八郎兵衛	屋守 喜兵衛
5	表田舎間四間五寸	裏幅五間	裏行十五間	同十五間	此坪数六十八坪	沽券金四拾八兩	小間二付拾貳兩券	家主 長左衛門	
6	表(田舎間脱カ)貳十間	裏幅拾四間半	裏行折廻シ式拾九間老尺	同式拾貳間	此坪数四百三十三坪	沽券金貳百兩	小間二付八兩券	地主 市三郎*	屋守 佐右衛門
7	表田舎間六間	裏幅六間	裏行六間三尺	同六間三尺	此坪数四拾坪	沽券金三拾六兩	小間二付五兩券	(「家主」脱カ)善六	
8	表田舎間拾老間式尺	裏幅拾老間老尺	裏行六間三尺	同六間三尺	此坪数七拾貳坪	沽券金六拾六兩	小間二付六兩券	地主 甚八*	屋守 善兵衛
9	表田舎間六間老尺	裏幅六間三寸	裏行拾老間三尺	同拾老間四尺	此坪数六拾九坪	沽券金九拾六兩	小間二付六兩券	家主 九右衛門	
10	表田舎間八間三尺五寸	裏幅八間三尺	裏行十老間四尺	同十老間三尺	此坪数九十八坪	沽券金百三拾六兩	小間二付六兩券	家主 勘兵衛	
11	表田舎間八間四尺	裏幅八間五尺	裏行拾老間五尺	同拾老間四尺	此坪数百三坪	沽券金百三拾六兩	小間二付六兩券	家主 三郎兵衛	
12	表田舎間八間式尺三寸	裏幅八間	裏行十老間老尺五寸	同十老間四尺	此坪数九拾貳坪	沽券金百貳拾八兩	小間二付六兩券	家主 長右衛門	
13	表田舎間三間四尺	裏幅三間三尺八寸	裏行十老間三尺	同拾老間老尺五寸	此坪数三十九坪	沽券金五拾六兩	小間二付六兩券	家主 十郎兵衛	
14	表田舎間五間五寸	裏幅四間五尺	裏行拾老間式尺	同拾老間三尺	此坪数五拾壹坪	沽券金八拾兩	小間二付六兩券	家主 元右衛門	
15	表田舎間五間三尺五寸	裏幅五間老尺	裏行九間五尺	同十老間式尺五寸	此坪数五十五坪	沽券金八拾八兩	小間二付六兩券	地主 八郎兵衛	
16	表田舎間七間三尺五寸	裏幅六間四尺	裏行七間五尺五寸	同九間五尺	此坪数六十坪	沽券金百五兩	小間二付五兩券	家主 利右衛門	
17	表田舎間五間三尺	裏幅五間四尺	裏行五間式尺	同七間式尺五寸	此坪数三十四坪	沽券金七拾兩	小間二付四兩券	家主 吉右衛門	
18	表田舎間六間式尺五寸	裏幅六間三尺五寸	裏行三間	同五間式尺	此坪数式拾七坪	沽券金四拾八兩	小間二付八兩券	家主 四郎兵衛	
19	表田舎間三間式尺五寸	裏幅三間二尺五寸	裏行■(貳カ)間四尺	同式間四尺	此坪数七坪	沽券式拾■(老)兩	小間二付七兩券	家主 伊右衛門	
20	表田舎間拾老間三尺六寸	裏幅拾老間三尺	裏行十三間式尺	同拾貳間老尺	此坪数百四拾七坪	沽券金百八拾四兩	小間二付六兩券	家主 平右衛門	
21	表田舎間十三間	裏幅九間三尺五寸	裏行十四間	同十三間式尺	此坪数百五十式坪	沽券金貳百八兩	小間二付六兩券	家主 八郎兵衛	
22	表田舎間十老間	裏幅十老間五尺	裏行三十間半	同三十間半	此坪数三百五十八坪	沽券金百六拾五兩	小間二付五兩券	家主 五郎兵衛	
23	表(「田舎間」脱カ)五間式尺	裏幅五間	裏行十老間式尺	同拾老間式尺	此坪数五十六坪	沽券金六十兩	小間二付拾貳兩券	地主 又右衛門※	家守 治郎右衛門
24	表田舎間十老間五寸	裏幅拾老間五寸	裏行拾貳間式尺	同拾貳間	此坪数老百三拾貳坪	沽券金百三拾貳兩	小間二付拾貳兩券	地主 七兵衛	家守 市兵衛
25	表田舎間九間三尺六寸	裏巾九間式尺四寸	裏行十三間三尺	同拾貳間式尺	此坪数百廿壹坪	沽券金百拾四兩	小間二付拾貳兩券	地主 七兵衛	家守 長兵衛
26	表田舎間十老間四尺	裏巾十老間式尺	裏行十四間	同十式間式尺	此坪数百五十坪	沽券金百廿六兩貳分	小間二付拾老兩券	地主 平七*	家守 作兵衛
27	表田舎間六間七寸	裏幅六間七寸	裏行十三間式尺	同拾三間式尺	此坪数八十坪	沽券金六拾六兩	小間二付十老兩券	地主 弥平次	家守 源左衛門
28	表田舎間九間四尺	裏巾六間六尺六寸	裏行十八間式尺	同九間三尺	此坪数百坪	沽券金百四兩貳分	小間二付拾老兩券	家主 太兵衛	
29	表田舎間三間五尺	裏巾三間老寸	裏行十式間	同拾貳間	此坪数四十式坪	沽券金四拾四兩	小間二付拾老兩券	(「家主」脱カ)甚三郎	
30	表田舎間六間老尺	裏巾六間三尺	裏行十三間老尺五寸	同十式間半	此坪数八十坪	沽券金六十六兩	小間二付拾老兩券	(「家主」脱カ)七右衛門	
31	表田舎間十間	裏巾九間四尺	裏行拾貳間	同十老間五尺	此坪数百拾五坪	沽券金百拾兩	小間二付拾老兩券	家主 八郎兵衛	家守 作右衛門
32	表田舎間式間	(記載なし)	裏行十五間 但三角屋敷	同	此坪数拾五坪	沽券金貳拾兩	小間二付拾兩券	地主 源兵衛	
33	表田舎間六間四尺	裏巾六間四尺	裏行貳十四間 但入寄有之	同三十間	此坪数百八十坪	沽券金七拾老兩貳分	小間二付拾老兩券	地主 市兵衛	
34	表田舎間六間五尺	裏巾四間四尺五寸	裏行貳十四間	同三十間	此坪数百五十八坪	沽券金七拾七兩	小間二付十老兩券	地主 松次郎*	家守 長右衛門
35	表田舎間七間半	裏巾七間半	裏行二十間	同■(貳カ)拾參間	此坪数百六拾壹坪	沽券金八拾貳兩貳分	小間二付拾老兩券	地主 太右衛門	家守 佐兵衛
36	表田舎間十三間老尺	裏幅拾三間老尺	裏行拾貳間式尺	同十式間	此坪数百五十七坪	沽券金百五拾六兩	小間二付拾貳兩券	地主 七兵衛	家守 甚右衛門
37	表田舎間七間九寸	裏幅七間九尺	裏行十式間	同十式間	此坪数八拾四坪	沽券金八拾四兩	小間二付拾貳兩券	地主 又左衛門*	家守 安兵衛
38	表田舎間五間三尺	裏幅五間三尺	裏行十式間	同十式間	此坪数四拾六坪	沽券金六拾六兩	小間二付拾貳兩券	家主 弥兵衛	
39	表田舎間七間三尺	裏幅七間四尺	裏行十式間	同十式間	此坪数九拾坪	沽券金九拾兩	小間二付拾貳兩券	家主 五郎左衛門	
40	表田舎間九間五尺	裏幅九間五尺	裏行十式間老尺	同十式間老尺五寸	此坪数百十七坪	沽券金百八兩	小間二付拾貳兩券	家主 十右衛門	
41	表田舎間五間四尺	裏幅五間四尺	裏行六間四尺	同六間四尺	此坪数三拾六坪	沽券金五拾五兩	小間二付拾兩券	地主 五兵衛※	家守 藤兵衛
42	表田舎間四間四尺	裏幅四間三尺	裏行十式間	同十式間	此坪数五十四坪	沽券金五拾四兩	小間二付拾貳兩券	家主 新四郎	
43	表田舎間五間式尺貳寸	裏幅四間式尺	裏行十式間式尺	同十式間式尺	此坪数六十四坪	沽券金六拾兩	小間二付拾貳兩券	家主 又七	
44	表田舎間五間三尺五寸	裏幅五間式尺五寸	裏行十式間老尺五寸	同十式間老尺五寸	此坪数六拾七坪	沽券金六拾六兩	小間二付拾貳兩券	家主 □(勸力)右衛門	
45	表田舎間五間[張紙で抹消]	裏幅五間[張紙で抹消]	裏行十式間老尺	同十式間老尺	此坪数六十坪	沽券金六拾兩	小間二付拾貳兩券	地主 宇兵衛*	家守 市兵衛
46	表田舎間五間五寸	裏幅四間五尺	裏行拾貳間老尺	同十式間老尺	此坪数五十七坪	沽券金七拾兩	小間二付拾貳兩券	家主 善右衛門	
47	表田舎間四(マ)間五尺五寸	裏幅十老間式尺三寸	裏行十式間老尺	同十式間式尺五寸	此坪数百四十坪	沽券金百廿老兩	小間二付拾老兩券	地主 三郎兵衛	家守 友右衛門
48	表田舎間拾老間四尺三寸	裏幅(「拾」脱カ)五間	裏行十式間式尺	同十式間式尺五寸	此坪数六十老坪	沽券金五十五兩	小間二付拾老兩券	地主 市郎右衛門	
49	表田舎間五間五寸	裏幅五間五寸	裏行十式間式尺	同十式間老尺	此坪数六十老坪	沽券金五拾五兩	小間二付拾老兩券	家主 藤兵衛	
50	表田舎間五間五寸	裏幅五間老尺	裏行拾貳間老尺	同十式間	此坪数六十坪	沽券金五十五兩	小間二付拾老兩券	家主 八兵衛	
51	表田舎間五間老尺	裏幅五間三尺	裏行十式間	同拾貳間	此坪数六拾六坪	沽券金六拾六兩	小間二付拾老兩券	地主 庄次郎	家守 利兵衛
52	表田舎間五間五尺八寸	裏幅五間四尺五寸	裏行十式間式尺	同拾貳間式尺	此坪数七十坪	沽券金六拾六兩	小間二付拾老兩券	地主 庄次郎	家守 利兵衛
53	表田舎間五間四尺五寸	裏幅五間老尺五寸	裏行十老間五尺	同十老間式尺三寸	此坪数六十三坪	沽券金六拾兩貳分	小間二付拾老兩券	家主 庄次郎	
54	表田舎間六間五尺	裏幅十老間老尺	裏行十老式尺三寸	同八間三尺八寸	此坪数九十坪	沽券金七拾老兩貳歩	小間二付拾老兩券	家主 庄次郎	
55	表田舎間九間三尺	裏幅九間三尺	裏行貳十四間半	同式十四間半	此坪数二百式拾七坪	沽券金七拾六兩	小間二付八兩券	地主 又右衛門※	家守 次郎右衛門
56	表田舎間拾貳間式尺	(記載なし)	裏行十式間	同式十五間	此坪数九十七坪	沽券金九拾六兩	小間二付八兩券	家主 市左衛門	
57	表田舎間拾老間	裏幅拾三間三尺	裏行拾貳間五尺	同拾貳間	此坪数百五拾坪	沽券金六拾六兩	小間二付六兩券	地主 七兵衛※	家守 市兵衛

58	表田舎間十老間	裏巾十間三尺	裏行式間三尺	同七間	此坪数五十老坪	沽券金廿七兩貳分	小間二付貳兩貳分券	家主 弥平次	
59	表田舎間六間	裏幅六間	裏行式間三尺	同式間三尺	此坪数九十五坪	沽券金拾貳兩	小間二付貳兩券	家主 徳左衛門印	
60	表田舎間十間	裏幅十老間	裏行九間貳尺	同七間三尺	此坪数八拾八坪半	沽券金廿兩	小間二付貳兩券	地主 兵右衛門印 (張紙)	
61	表八間	裏巾九間貳尺	裏行三間老尺	同四間四尺	此坪数三十式坪	沽券金貳拾兩	小間二付貳兩貳分券	家主 次郎右衛門	
62	表田舎間六間	裏幅六間	裏行十老間半	[ ]	此坪数六十九坪	沽券金貳拾四兩	小間二付四兩券	弥兵衛	
63	表田舎間六間	裏幅六間	裏行十老間半	同十老間半	此坪数六拾九坪	沽券金貳拾四兩	小間二付四兩券	五郎左衛門	
64	表田舎間八間貳尺	裏幅八間貳尺	裏行十式間	同十式間	此坪数八拾九坪	沽券金四十兩	小間二付五兩券	地主 五兵衛 ※	家守 七左衛門
65	表田舎間六間	裏幅六間	裏行十式間	同十式間	此坪数七十式坪	沽券金三十兩	小間二付五兩券	家主 七右衛門	
66	表田舎間十五間	裏幅十五間	裏行十式間	同十式間	此坪数百八十坪	沽券金七十五兩	小間二付五兩券	地主 惣兵衛・彦右衛門	家守 七兵衛
67	表田舎間五間半	裏幅五間半	裏行十式間	同十式間	此坪数六十六坪	沽券金貳拾七兩貳分	小間二付五兩券	助右衛門	
68	表田舎間六間半	裏幅六間半	裏行十老間半	同十老間半	此坪数七拾四坪七合五夕	沽券金三拾老兩貳分	小間二付五兩券	家主 弥平次	
69	表田舎間十五間半	裏巾式間三尺	裏行十老間半	同十老間半	此坪数百五拾五坪式合五夕	沽券金六十七兩貳分	小間二付五兩券	家主 五郎左衛門	
70	表田舎間五間三尺	裏巾式間三尺	裏行十五間半	同十五間半	此坪数六十式坪	沽券金拾六兩貳分	小間二付三兩券	地主 五郎左衛門	
71	表田舎間拾六間	裏幅十老間五尺	裏行六間三尺	同六間三尺	此坪数八十九坪	沽券金三十貳兩	小間二付貳兩券	与惣兵衛	
72	表田舎間七間四尺	裏巾四間	裏行十老間半	同十式間	此坪数六十八坪	沽券金拾老兩老分	小間二付老兩貳分券	家主 庄兵衛	
73	表式拾老間老尺	裏幅十五間四尺	裏行十四間	同十七間三尺	此坪数三百七拾九坪	沽券金貳百五拾貳兩	小間二付拾貳兩券	地主 五兵衛 ※	家守 源兵衛
74	表田舎間十老間	裏巾折廻し十五間半	裏行十式間貳尺	同九間	此坪数六十八坪	沽券金三拾三兩	小間二付三兩券	長左衛門	
75	表田舎間六間五寸	裏幅六間五尺	裏行十間貳尺	同拾間貳尺	此坪数六拾四坪	沽券金四拾八兩	小間二付八兩券	地主 吉右衛門	家守 十右衛門
76	表田舎間九間四尺	裏幅十老間	裏行九間貳尺	同八間	此坪数八拾七坪	沽券金七拾六兩	小間二付八兩券	作左衛門	
77	表十老間老尺五寸	裏幅拾老間三尺	裏行十間老尺	同十間五尺	此坪数百十八坪	沽券金七拾七兩	小間二付七兩券	地主 ※ 市郎兵衛	家守 嘉兵衛
78	表田舎間五間三尺九寸	裏幅五間老尺五寸	裏行十間五尺	同十老間三尺五寸	此坪数五拾八坪	沽券金三拾八兩貳分	小間二付七兩券	家主 喜兵衛	
79	表田舎間五間三尺九寸	裏幅五間三尺八寸	裏行十老間三尺五寸	同十式間	此坪数六十五坪	沽券金貳拾貳兩	小間二付四兩券	地主 半七 ※	家守 喜兵衛
80	表田舎間十五間三尺	裏幅十式間貳尺五寸	裏行十式間	同十式間	此坪数百五拾三坪	沽券金貳拾六兩	小間二付貳兩券	地主 半七 ※	家守 喜兵衛
81	表田舎間十老間五尺八寸	裏巾十老間老尺五寸	裏行十間三寸尺	同十老間四尺三寸	此坪数百四拾五坪	沽券金五拾五兩	小間二付五兩券	地主 又右衛門 ※	家守 吉右衛門
82	表田舎間十六間貳尺五寸	裏巾十五間	裏行十三間	同十老間三尺	此坪数百九拾坪	沽券金八拾兩	小間二付五兩券	地主 九右衛門 ※	家守 長兵衛
83	表田舎間五間	裏巾五間	裏行十式間	同十老間三尺	此坪数五拾八坪	沽券金廿五兩	小間二付五兩券	太右衛門	
84	表田舎間十六間四尺	裏巾十六間	裏行十三間三尺	同十三間三尺五寸	此坪数百九拾八坪	沽券金八拾貳兩貳分	小間二付五兩券	地主 長四郎 *	家守 四郎右衛門
85	表田舎間五間三尺五寸	裏幅五間	裏行十三間三尺五寸	同十四間	此坪数七拾二坪	沽券金廿七兩貳分	小間二付五兩券	地主 九郎左衛門 *	家守 七兵衛
86	表田舎間十五間	裏巾拾八間	裏行十六間	同十式間貳尺	此坪数三百廿三坪	沽券金百五兩	小間二付七兩券	地主 日向英俊 *	家守 吉左衛門
87	表田舎間 (未記載)	裏巾十老間五尺	裏行廿五式間貳尺十歩入寄 長五間横式間	同二十二間貳尺	此坪数三百四拾八坪	沽券金六拾三兩老分	小間二付五兩貳分券	善右衛門	利兵衛
88	表田舎間十七間四尺	裏巾十四間三尺	裏行十三間	同十式間老尺	此坪数貳百五坪	沽券金八十七兩貳分	小間二付五兩券	地主 久兵衛 *	屋守 喜助
89	表田舎間六間六尺五寸	裏幅八間	裏行九間	同十式間	此坪数百四拾九坪	沽券金三拾兩	小間二付五兩券	地主 六郎兵衛	屋守 五兵衛
90	表田舎間八間三尺	裏幅九間四尺	裏行十老間三尺	同十老間三尺	此坪数百四坪	沽券金廿五兩貳分	小間二付三兩券	十右衛門	
91	表田舎間十老間	裏幅七間三尺	裏行七間	同	此坪数六十七坪	沽券金廿貳兩	小間二付貳兩券	作左衛門	
92	表田舎間七間貳尺五寸	裏巾十老間三尺	裏行五間	同五間	此坪数三十六坪	沽券金拾五兩	小間二付貳兩券	地主 九右衛門 ※	家守 清兵衛
93	表田舎間十七間	裏幅十式間	裏行六間	同拾間三尺	此坪数百五十九坪	沽券金三拾四兩	小間二付貳兩券	十右衛門	
94	表田舎間式間	裏幅五間	裏行十六間	同十九間	此坪数六拾老坪式合五夕	沽券金拾兩	小間二付五兩券	作左衛門	
95	表田舎間拾間	裏幅拾間三尺	裏行十八間	同十六間	此坪数百七拾四坪式合五夕	沽券金六拾兩	小間二付六兩券	地主 森右衛門	家守 市兵衛
96	表田舎間十式間四尺	裏幅十三間三尺	裏行十六間	同十六間貳尺	此坪数貳百老坪八合	沽券金七拾五兩	小間二付六兩券	地主 ゑん	家守 久次郎
97	表田舎間貳拾六間	裏幅拾四間五尺	裏行拾間	同十八間	此坪数貳百八十四坪	沽券金七拾八兩	小間二付三兩券	又兵衛	
98	表田舎間十老間六尺	裏幅拾老間四尺	裏行式間	同三間四尺	此坪数貳拾九坪	沽券金貳十八兩三分	小間二付貳兩貳分券	六郎右衛門	
99	表田舎間九間五尺	裏幅七間老尺	裏行七間老尺	同八間老尺	此坪数六拾四坪	沽券金四拾七兩貳分	小間二付五兩券	地主 石尾玄啓	家守 十兵衛
100	表田舎間九間五尺	裏幅八間	裏行三拾式間老尺	同三十二間老尺	此坪数貳百七拾貳坪	沽券金四拾五兩	小間二付五兩券	又兵衛	
101	表田舎間六間三尺	裏幅六間■尺	裏行十六間	同十六間	此坪数百坪	沽券金三十貳兩貳[ ]	小間二付五兩券	[ ] 衛門	
102	表田舎間六間五尺	■(裏) 巾八間	裏行十八間	同斷三尺	此坪数百三拾坪	沽券金三拾八兩	小間二付五兩券	地主 弥右衛門	
102'	表間口九間貳尺	九間三尺	拾貳間貳尺	拾貳間貳尺	此坪数百拾六坪	沽券金貳拾兩	小間二付貳兩券	地主 弥右衛門	
103	表田舎間十老間四尺五寸	裏巾四間四尺	裏行式十式間四尺	同十式間貳尺	此坪数貳百九十九坪	沽券金六十三兩老分	小間二付五兩貳分券	市郎兵衛 ※	(家守) 又兵衛
①	麻布本村町 +印△+印迄 (1 ~ 4 谷戸町か)	惣坪数三百三十五坪 惣間口三拾間五尺五寸 沽券金高三百九拾四兩							
②	麻布本村町 △印△△印迄 (5 ~ 8 谷戸町)	惣坪数六百拾三坪 惣間口四拾六間貳尺五寸 沽券金高三百五拾兩							
③	麻布本村町 ○印△○印迄 (9 ~ 19 上ノ町)	惣坪数六百三拾五坪 惣間口六拾九間三寸 沽券金高九百六拾四兩							
④	麻布本村町 井印△井印迄 (22 ~ 35 仲町)	惣坪数千七百四拾八坪 惣間口百七間貳尺三寸 沽券金高千貳百三拾九兩							
⑤	麻布本村町 ×印△×印迄 (36 ~ 54 仲町)	惣坪数千四百六拾三坪 惣間口惣間口 (ママ) 百式拾間五間五尺四寸 沽券金高千四百六拾老兩							



⑥	麻布本村町 ㊦印分 (55 ～ 57 御殿新道)	惣坪数四百七拾四坪 惣間口三拾貳間五尺 沽券金高貳百三拾八兩				
⑦	麻布本村町 ㊧印分 (58 ～ 61 御殿新道)	惣坪数百八拾六坪 惣間口三拾五間 沽券金高七拾九兩貳分				
⑧	麻布本村町 ▲印分 (62～70 御殿新道)	惣坪数八百三拾七坪 惣間口六拾貳間貳尺 沽券金高三百三拾六兩				
⑨	麻布本村町▲印分 (71・72 御殿新道)	惣坪数五百五拾七坪 惣間口貳拾三間四尺 沽券金高四拾三兩壹分				
⑩	麻布本村町此 ㊩印分 (73 ～ 76)	惣坪数五百九拾八坪 惣間口四拾七間五尺五寸 沽券金高四百九兩				
⑪	麻布本村町 ㊪印分 ㊫印分 (77 ～ 80)	惣坪数三百九拾四坪 惣間口三拾間三尺三寸 沽券金百三十六兩貳步				
⑫	麻布本村町 ㊬印分㊭印分 (81 ～ 85) ㊮印分㊯印分 (86 ～ 90)	惣坪数五 (六の誤りか) 百六拾三坪 惣間口五拾四間五尺六寸 沽券金貳百七拾兩 惣坪数千百貳拾九坪 惣間口五拾八間三尺五寸 沽券金高三百拾壹兩壹分				
⑬	麻布本村町此 ㊰印 (91 ～ 94)	惣坪数三百五拾九坪貳合五夕 惣間口三拾七間貳尺五寸 沽券金高八拾壹兩				
⑭	麻布本村町市兵衛・久次郎 (95・96)	惣坪数三百八拾六坪五夕 惣間口貳拾貳間四尺 沽券金高百三拾五兩				
⑮	麻布本村町又兵衛・六郎右衛門 (97・98)	惣坪数三百拾三坪 惣間口三拾七間五尺 沽券金高百六兩三分				
⑯	麻布本村町此・印分 (99 ～ 103)	惣坪数九百七拾五坪 惣間口五拾六間五尺 沽券金高貳百四拾兩壹分				
A	永川社					
B	別当 徳乗院					
C	妙行寺					
D	春桃院					
E	天真寺					
F	遍照寺					
G	徳養寺					
H	浄林寺					
I	称念寺					
J	東福寺					
K	浄専寺					
L	延命院					
M	曹溪寺					
N	龍潭寺					
O	明称寺					
P	龍穩寺					
Q	西福寺					
R	円澤寺					
①	山崎兵庫殿	③4	此末御殿跡武士屋舗	69	下水幅五寸 公儀地	
②	善福寺門前	③5	小出主水殿 門	70	道幅貳間三尺 下水共	
②'	善福寺境内	③6	小出主水殿	71	下水幅六間 公義地	
②''	是ヶ善福寺	③7	下水幅八尺 (朱書) 公儀地	72	道幅三間半 下水共	
③	道幅四間壹尺 下水共	③8	下水幅八尺 公儀地	73	植村三蔵殿	
④	下水幅壹尺 公義地	③9	畑			
⑤	下水幅壹尺 公義地	④0	道幅四間壹尺 下水共二			
⑥	稲荷社	④1	下水幅六寸 公義地			
⑦	辻番	④2	松平陸奥守殿			
⑧	道幅五間半 下水共	④3	道幅九尺			
⑨	松平陸奥守殿	④4	道幅八間半 下水共			
⑩	三枝伝左衛門殿	④5	下水幅六寸 公義地			
⑪	下水幅壹尺 公義地	④6	高札			
⑫	道幅五間半	④7	下水幅六寸 公義地			
⑬	是ヨリ善福寺	④8	道幅四間 下水共			
⑭	火之見	④9	道幅壹間			
⑮	道幅五間 下水共	⑤0	下水幅七寸 公義地			
⑯	下水幅壹尺 公義地	⑤1	道幅三間半			
⑰	下水幅壹尺 公義地	⑤2	門 松平陸奥守殿			
⑱	道幅五間貳尺 下水共	⑤3	道幅壹間			
⑲	辻番	⑤4	道幅五尺			
⑳	下水幅壹尺 公義地	⑤5	百姓地			
㉑	道幅 (ママ)	⑤6	道幅三間半			
㉒	此末三軒屋町通り	⑤7	内藤銀市郎殿			
㉓	南部修理太夫殿	⑤8	道幅三間五尺 下水共			
㉔	与力衆組屋舗	⑤9	下水幅七寸 公義地			
㉕	同心衆組屋敷	⑥0	辻番			
㉖	道幅四間 下水共	⑥1	土屋左門殿			
㉗	下水幅壹尺五寸 公義地	⑥2	此末渋谷通り			
㉘	下水幅六寸 公義地	⑥3	新堀			
㉙	道幅三間	⑥4	田嶋町			
㉚	自身番	⑥5	薬園橋 此橋卯ヶ武士方組合御普請			
㉛	道幅三間 下水共	⑥6	道幅四間			
㉜	土橋 □所入用橋	⑥7	此末三田古川町通り			
㉝	道幅四間	⑥8	道幅貳間三尺			

算から漏れている。

また記載では、小間高について「小間二付拾貳兩券」といった末尾に「券」を付けた表記としている。金額の後に文言が記されるものは、大伝馬町一・二丁目・通旅籠町・堀留町一・二丁目の延享沽券図の「間口一間二付百兩間」しかみられない。「券」は売券Ⅱ沽券状を指し、売買を念頭においた記載だったと考えておきたい。

では、小間高を検討したい。本図は、全一〇三筆を、一六のグループに分割して表記している。「町方書上」と切絵図の里俗名と照合すると、おおよそ①・②は谷戸町、③は上ノ町、④・⑤は仲町（新町・東西横町）、⑥・⑨は「西之方ニ而地高之所」でかつての白銀御殿に通じていた御殿新道（西ノ台）、⑩・⑬は「南之方三ヶ町」（南町・仲南町・大南町）ほかM曹溪寺の名僧の名にちなんだ総称として「絶江」に対応すると思われる。

各屋敷の小間高は、最低が金一兩二分（72）、最高が一六兩（九屋敷）と同じ町内でも幅がある。この小間高を価格別に集計したのが、表4である。ピークが五兩、一兩、二兩にあるため、便宜的に四つのランクに分け、図7にもランクを示した。最高ランクとした一四兩以上は二筆（二二%）で、③上ノ町に集中し、ほか上ノ町に近い④仲町の22となる。次のランク一兩・二兩が最も多く三七筆（三六%）で、谷戸町の①、仲町の④・⑤に集中する。三番目の五兩から一〇兩までは三六筆（三五%）で、五兩が一八筆を占める。分布は谷戸町の東②、御殿新道の⑥・⑧、南之方三ヶ町の⑩・⑫、⑭・⑯となる。四番目の四兩以下一八筆（一七%）は、三番目と同じく、御殿新道の⑧の西端と⑦・⑨、南之方三ヶ町の⑪の奥、⑬、⑮となる。したがって、小間高の評価額は、仙台坂に面した上ノ町③、次いで同じく仙台坂に面しないし接した谷戸町①・②、および新道に面する仲町④・⑤、そして、もっとも評価が低いのが奴坂に面した御殿新道⑦・⑨、薬園坂（⑩）などに面した南之方三ヶ町⑩・⑬、⑯、となろう。

表4 麻布本村町の小間高

ランク	小間高(金)	屋敷数	屋敷番号(表3・図7と対応)
4兩以下 (17%)	壹兩二分	1	72
	貳兩	7	59, 60, 71, 80, 91～93, 102'
	貳兩貳分	3	58, 61, 96
	三兩	4	62, 74, 90, 95
	四兩	3	69, 70, 79
5兩～ (35%)	五兩	18	7, 63～68, 81～85, 88, 89, 94, 97, 98, 100, 102
	五兩二分	2	87, 101
	六兩	4	8, 57, 103
	七兩	4	19, 77, 78, 86
	八兩	6	6, 18, 55, 56, 75, 76
	十兩	2	32, 41
11兩・12兩 (36%)	十壹兩	17	26～31, 33～35, 47～54
	拾貳兩	20	1～5, 23～25, 36～39, 40, 42～46, 73, 99
14兩以上 (12%)	拾四兩	1	17
	拾五兩	2	16, 22
	拾六兩	9	9～15, 20, 21

このうち、仲町は、寛文元（一六六一）年に仙台藩の下屋敷<sup>(42)</sup>・拝領で「奥州街道」がとりこまれてしまったために新たに作られた道に展開し、その段階で「不残百姓商売家」となった「新町」であった。各町とも角屋敷にはそれほど小間高の差は見られず、面した通りが小間高に大きな影響を与えているといえよう。

次に地主を検討しておきたい。一〇三筆のうち、家守をおいている屋敷は四二筆であり、全体の約四割にあたる。このうち一筆一人は他に町内に屋敷を所持していない者（表3\*）、また二三筆は押印がないため同名別人の可能性もあるが、六人の者が複数所持して家守を伴っている（※）。三屋敷以上所持しているのは、七兵衛（24・25・36・57）を筆頭に、五兵衛（41・64・73）、又右衛門（23・55・81）である。この二四筆一七人は「地主」と表記されており、居所は示されないものの、他町に住む不在地主の可能性がある。

これに対して、「家守」が置かれない居付地主は「家持」ではなく、「家主」と表記されている。例外は、「地主」表記の八郎兵衛（15）、源兵衛（32）、市兵衛（33）、市郎右衛門（48）、兵右衛門（60）、五郎左衛門（70）、弥右衛門（102）である。ここでは例として、「町方書上」で「草創人」とされる四人についてみておきたい。押印がないため特定は不可能だが、江州出身で佐々木氏・武田氏に仕え、天正七（一五七九）年に信州から本町に移住したという伝承を持つ作左衛門は、おそらく76・91・94の家主であろう。また、鎌倉日出川福泉谷の出身で文禄二（一五九三）年に麻布村に來住した五郎左衛門は、39・63・69・70の家主・地主であろう。このほか、八郎兵衛は4・15・21・31の家主・4の地主、市郎右衛門は48の家主と考えられる。本図では「家主」の居所が書かれていないが、「家守」がおかれない場合も鑑みると、町内の者が複数屋敷を所持している可能性が高い。

#### 4 「駒込追分町・同九軒屋鋪・同丸山新町・同片町沽券図」（図9・10・表5）

本図は、従来情報がなかった江戸西北部のものであり、3麻布本村町と同様に場末の状況が知られることから、貴重である。さらに、事例の少ない拝領町屋敷を含んでいる点も重要である。また、通常の沽券図から得られる情報のみならず、中山道側のほかに日光御成道側にも一里塚が存在していたことがはじめて確認できるなど、地域史研究の史料としても有効である。

町域が元來属していた駒込村は、江戸の場末から近郊農村部にまたがって存在していた。<sup>(32)</sup> 安政三（一八五六）年『武蔵国全図』、文政元（一八一八）年「江戸朱引図」や町奉行所出場限によれば、駒込村の南部の半分から三分の一は江戸府内に含まれている。駒込村が接する村々のうち、南半分に隣接する谷中村・小石川村にも一部に黒引が懸かっていた。また、「小荷駄馬口附之者」の乗り入れを禁じた下馬杭（元禄一一（一六九八）年制定「江戸外傍示杭」）が、当村の目赤不動と駒込竹町に建てられており、幕府がこの地点から建物の密集化を認識していたことがわかる。<sup>(33)</sup> 前稿では、分析を駒込追分町に留めたため、本稿では全容を検討したい。以下、史料批判と現存する沽券図の作成・伝来を検討したうえで（1）、町ごとの状況を示したい（2）。

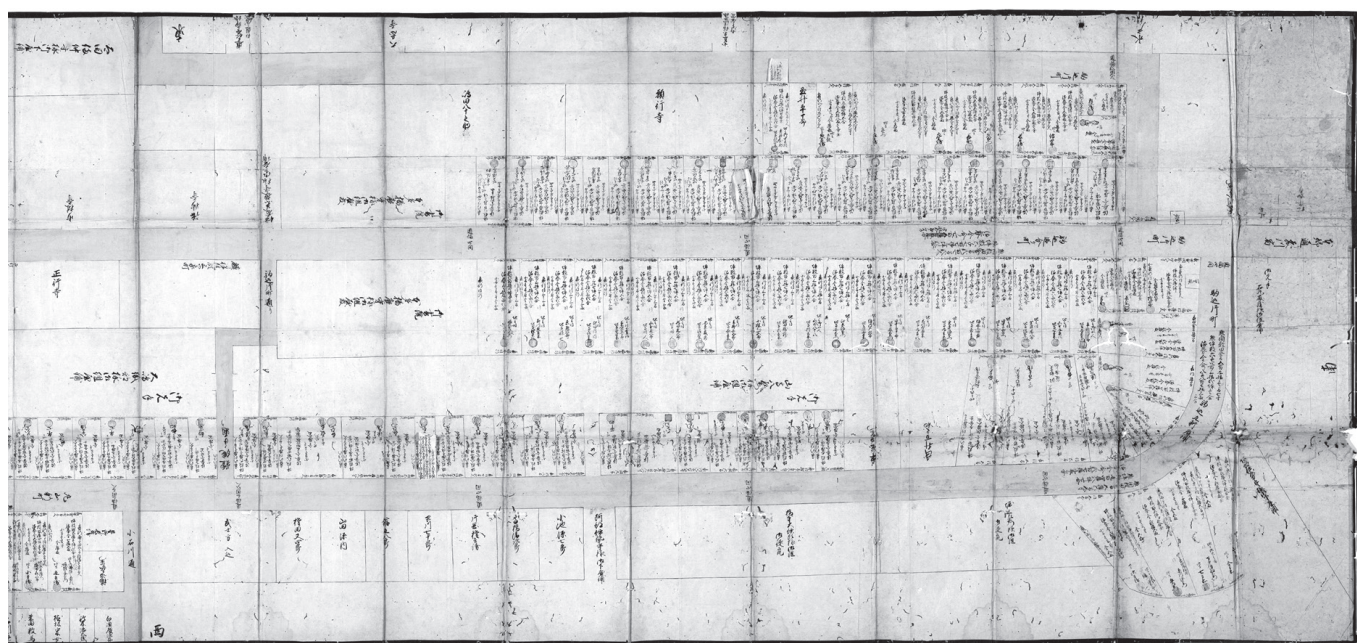
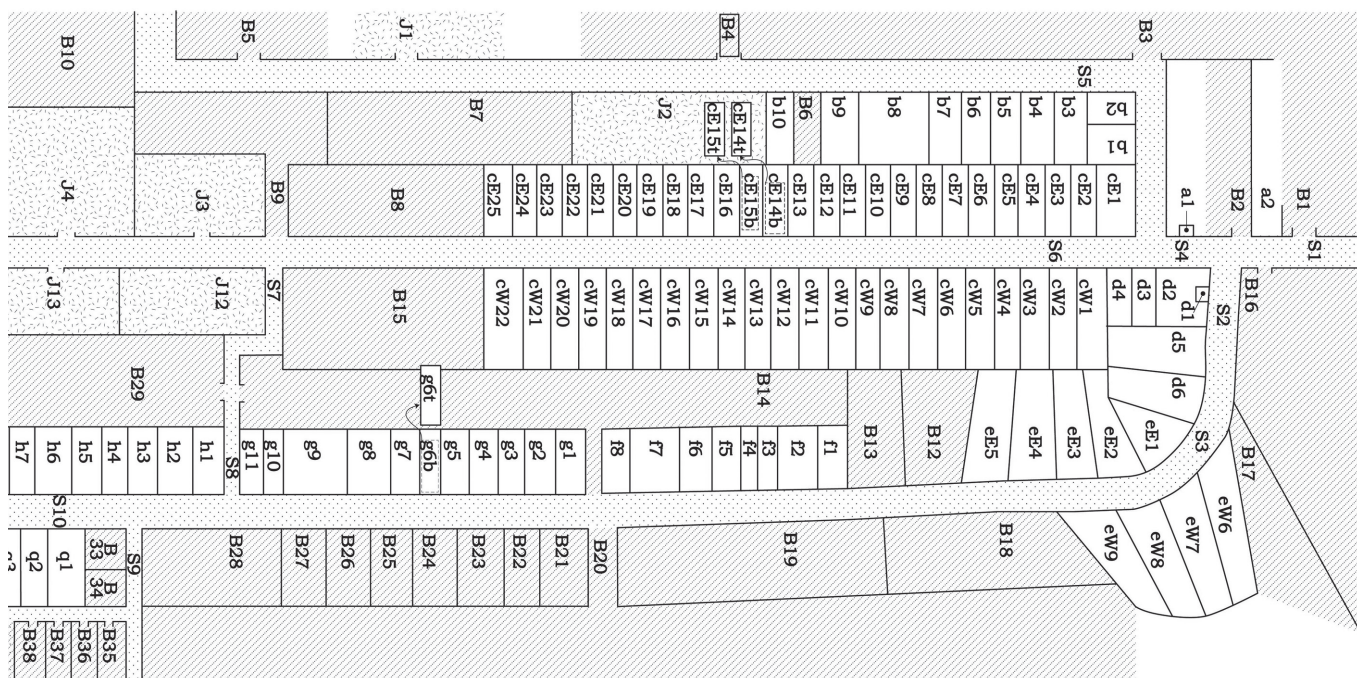
##### （1）史料批判

本史料は、縦一一七・九〇cm、横五〇〇・〇〇cmの彩色の絵図で、現状では四一・〇cm×二四・五cmに折り畳んだ状態で保管されている（カラー図版⑫・図9写真）。

前章で指摘したように、現存する延享沽券図は記載文言と家守・居付地主・町役人・名主の捺印より六タイプに分けられる。本沽券図の文言は、次の通りである。

駒込追分町・九軒屋鋪・丸山新町之儀、不残拝領屋敷二而沽券無御







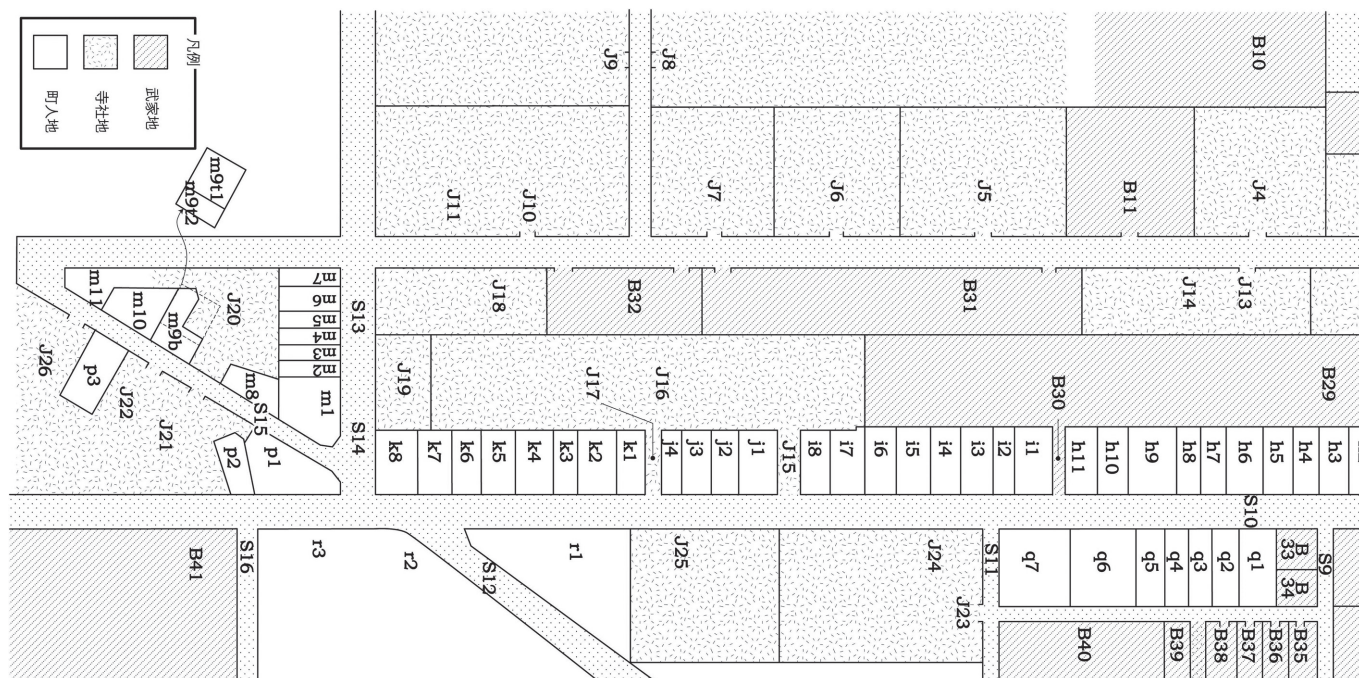


図 10 「駒込追分町・同九軒屋舗・同丸山新町・同片町沽券図」トレース図

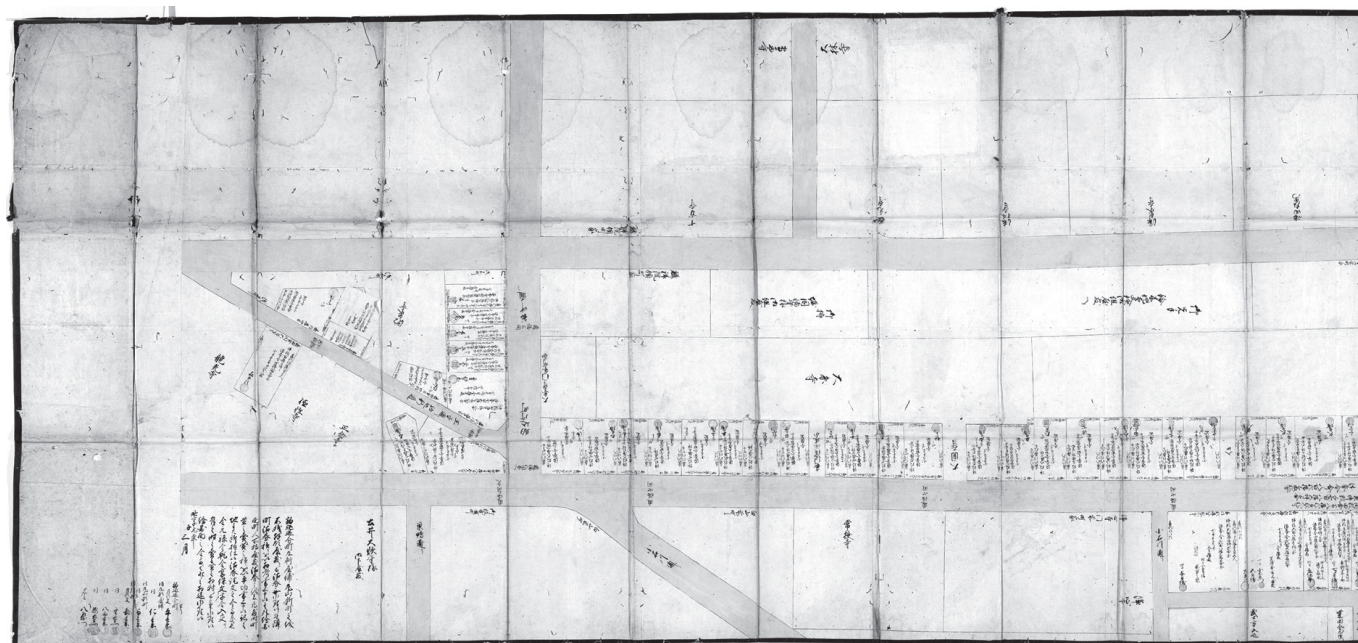


図9 「駒込追分町・同九軒屋舗・同丸山新町・同片町沽券図」(国立歴史民俗博物館蔵)  
複数の分割撮影した画像を接合・編集して1枚の画像とした。

凡例 a～r:町人地区画 / B:武家地 / J:寺社地 / W:通り西側 / E:通り東側 / a:関連項目枝記号 / b:付箋下 / t:付箋上 / x:敷地外付箋 / 墨・丸印 ○ / 墨・角印 □ / 墨・菱印 ◇ / ■:虫損・カスレにつき不読

[illegible]

表5 「駒込追分町・同九軒屋舗・同丸山新町・同片町沽券図」(国立歴史民俗博物館蔵) 記載一覧(記号は図10に対応)

区分	記号	記載	町屋敷種別	間口ほか	裏幅	面積	沽券高
町域表示・通り名ほか	S1	本郷通り森川宿					
	S2	駒込片町		惣間数田舎間五百九拾壹間七寸 惣坪数六千四百三拾貳坪壹合 沽券金合テ八千八百七拾三兩三分			
	S3	駒込九軒屋敷		惣間数田舎間五拾六間五寸 惣坪数九百四拾八坪七合 沽券金合テ貳百七拾九兩三分			
	S4	駒込片町					
	S5	駒込片町		道幅貳間五尺			
	S6	駒込追分ヶ町		惣間数田舎間貳百七間貳尺 惣坪数六千七百七拾三坪貳合 ゝゝゝゝゝゝ 沽券金合テ七百五拾七兩三分 四拾五兩三分			
	S7	駒込片町通り					
	S8	鯉縄手通り					
	S9	小石川通り					
	S10	丸山新町		惣間数田舎間八拾貳間貳尺貳寸 惣坪数千七百八拾五坪三合 沽券金合テ八百貳拾三兩貳分			
	S11	小石川通り					
	S12	小石川通り					
	S13	谷中通り					
	S14	駒込片町 道幅貳間五尺					
	S15	王子通り駒込新道 道幅壹間四尺					
	S16	栗鴨通り					
駒込片町		駒込片町		道幅二間貳尺			
	a1			一里塚			
	a2			辻番所			
		駒込片町		道幅貳間五尺			
	b1			表田舎間七間三尺		坪数四拾貳坪五合	沽券金七拾五兩
	b2			表田舎間五間四尺五寸		坪数拾六坪貳合余	沽券金五拾七兩貳分
	b3			表同五間五寸	裏幅表同断	坪数六拾貳坪貳合余	沽券金五拾兩三分余
	b4			表同五間貳尺	裏幅表同断	坪数六拾九坪八合	沽券金五拾三兩壹分
	b5			表同五間壹尺	裏幅表同断	坪数六拾八坪四合余	沽券金五拾三兩貳分余
	b6			表同四間三尺	裏幅同三間三尺七寸	坪数五拾五坪六合	沽券金四拾五兩
	b7			表同五間	裏幅表同断	坪数七拾坪七合余	沽券金五拾兩
	b8			表同拾五間	裏幅表同断	坪数貳百貳拾七坪貳合	沽券金百五拾兩
	b9			表同五間五尺	裏幅表同断	坪数九拾四坪五合	沽券金五拾八兩壹分余
	b10			表同四間壹尺	裏幅表同断	坪数六拾八坪七合余	沽券金五拾貳兩貳分
	b10x			明治二巳年七月中、駒込片町へ合併ニ相成候			
駒込追分ヶ町	cW1	道幅四間	拝領地(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW2	道幅三間貳尺	同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW3		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW4		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW5		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW6		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW7		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW8		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW9		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW10		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW11		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW12		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW13		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW14		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW15		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW16		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW17		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW18		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW19		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cW20		同(朱筆)	表田舎間四間壹尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分



小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	相川与一兵衛		地守	理平次	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	福住武右衛門		地守	与兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行三十三間	裏行同断	地主御小人	内田四郎兵衛		地守	覚兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	西村権蔵		地守	仁兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	渡部清六		地守	長左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	渡邊平内		地守	惣兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	鳥羽左次右衛門		地守	八兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	荒井平蔵		地守	権兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	相川九兵衛		地守	太郎兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	松田久四郎		地守	善左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主御小人	長谷川勘兵衛		地守	九兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主小普請	松井五右衛門		地守	平兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	平間伝蔵		地守	与左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付(金四兩カ。記載なし)	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	木村又六		地守	同人	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	田中惣助		地守	宇右衛門	印(墨・丸)		
(小間壱間ニ付金四兩)	裏行同三十三間	裏行同断	(地主御小人)	(須藤忠蔵)		(地守)	(清右衛門)	(印(墨・丸))	[付箋] 沽券金拾貳兩式分 小間壱間ニ付金三兩	cE14t
(小間壱間ニ付金四兩)	裏行同三十三間	裏行同断	(地主小普請)	(沢木平助)		(地守)	(兵右衛門)	(印(墨・丸))	[付箋] 沽券金拾貳兩式分 小間壱間ニ付金三兩	cE15t
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主御駕籠頭	北条左平次		地守	長右衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金四兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	池田喜八郎		地守	与兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	宮崎善八		地守	同人	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	前田鉄次郎		地守	三左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	小貫権左衛門		地守	安兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	広瀬弥五郎		地守	清兵衛			
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	小沢忠蔵		地守	七兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	小貫清七		地守	勘兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主同	嶋田与五兵衛		地守	清兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金三兩	裏行同三十三間	裏行同断	地主御小人	北条弥助		地守	孫四郎	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金貳拾壱兩式分	南裏行同九間壱尺	北裏行同九間五寸	地主	権三郎	印(墨・丸)					
小間壱間ニ付金拾貳兩	裏行同九間五寸		地主	長右衛門	印(墨・角)					
小間壱間ニ付金拾貳兩	裏行同九間		地主	半助	印(墨・丸)					
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行同拾五間三尺	裏行同断	地主	■左衛門		家守	半兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行同拾四間三尺		地主	左次兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間ニ付金五兩	裏行□□(西ニテ) 拾五間三尺	裏行東ニテ同拾六間	地主御小人	寺沢新三郎		地守	仁兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行西ニテ同拾九間四尺	□□(裏行) 東□□(ニテ) 同拾七間	地主御春屋方	中根惣市郎		地守	源左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行同西ニテ式拾壱間	裏行東ニテ同拾九間三尺	地主御小人	洞助太夫 小林勝之助		地守	善兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行西ニテ同式拾貳間四尺	裏行東ニテ同式拾壱間壱尺	地主御小人	伊内甚左衛門		地守	半兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金□(五) 兩	裏行にしニテ式拾四間	裏行東ニテ同式拾貳間四尺	地主御小人	西村次郎兵衛		地守	市郎右衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行東側ニテ同三拾間式尺	裏行西ニテ同式拾六間四尺	地主表御台所	山本惣兵衛		地守	金兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行東ニテ同式拾六間四尺	裏行西ニテ同式拾三間	地主御火之番	才戸治部右衛門		地守	七兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行東ニテ同式拾三間	裏行西ニテ同式拾貳間壱尺七寸	地主養仙院様附	糸川弥右衛門		地守	平左衛門	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金五兩	裏行東ニテ同式拾貳間壱尺七寸	裏行西ニテ同式拾壱間四尺	地主小普請	吉川源太郎		地守	次兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	源左衛門						
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	寿天		家守	彦八			
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	寿■		家守	彦七			
小間壱間ニ付金■五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	与兵衛						
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	与五郎		家守	善右衛門			
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	次郎右衛門						
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行同 (拾壱間三尺カ)	裏行同断	地主	六右衛門						
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行拾壱間三尺	裏行同断	地主	市助						
小間壱間ニ付金貳拾兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	次郎左衛門						
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	吉兵衛		家守	仁兵衛			
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	長兵衛		■	市兵衛			
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	権兵衛						
小間壱間ニ付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	七左衛門						



	cW21		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cW22		同 (朱筆)	表田舎間六間三尺	裏幅表同断	坪数貳百拾四坪五合	沽券金拾九兩貳分
	cE1		同 (朱筆)	表田舎間六間貳尺	裏幅表同断	坪数貳百九坪	沽券金三拾兩三分
	cE2		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE3		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE4		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE5		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE6		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE7		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE8		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE9		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE10		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE11		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE12		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE13		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE14		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	(坪数百三拾七坪五合)	(沽券金拾六兩貳分)
	cE15		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	(坪数百三拾七坪五合)	(沽券金拾六兩貳分)
	cE16		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE17		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾六兩貳分
	cE18		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE19		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE20		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE21		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE22		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE23		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE24		同 (朱筆)	表田舎間四間壱尺	裏幅表同断	坪数百三拾七坪五合	沽券金拾貳兩貳分
	cE25	道幅四間	拝領地(朱筆)	表田舎間七間	裏幅表同断	坪数貳百三拾壹坪	沽券金貳拾壹兩
駒込片町	d1	道幅四間		一里塚			
	d2			表田舎間拾間四尺七寸	裏幅同拾間三尺	坪数八拾八坪	沽券金百八拾八兩三分余
	d3			表同五間	裏幅同断	坪数四拾五坪四合余	沽券金六拾兩
	d4			表同五間五尺	裏幅同断z	坪数五拾貳坪五合	沽券金七拾兩
	d5			表田舎間拾間	裏幅表同断	坪数百五拾五坪	沽券金貳百兩
	d6			表同拾間	裏幅同断	坪数百四拾五坪	沽券金貳百兩
駒込九軒屋敷	eE1	(拝領地)	同 (朱筆)	表同拾壹間五尺	-	坪数八百四拾九坪貳合余	沽券金五拾六兩貳分
	eE2		同 (朱筆)	表同六間五尺	裏幅貳間四尺	坪数八拾七坪余	沽券金三拾四兩
	eE3	道幅四間	同 (朱筆)	表同六間	裏幅四間	坪数百壹坪貳合余	沽券金三拾兩
	eE4		同 (朱筆)	表同五間	裏幅同四間壱尺	坪数百坪四合余	沽券金貳拾五兩
	eE5		拝領地(朱筆)	表同五間	裏幅同四間壱尺	坪数百六坪九合余	沽券金貳拾五兩
	eW6		拝領地(朱筆)	表田舎間五(ㇿ)間五尺	裏幅同三間壱尺	坪数百貳拾八坪貳合余	沽券金貳拾九兩余
	eW7		同 (朱筆)	表同六間	裏幅同四間	坪数百貳拾四坪壹合余	沽券金三拾兩
	eW8		同 (朱筆)	表同五間	裏幅同四間貳尺	坪数百五坪五合余	沽券金貳拾五兩
	eW9		同 (朱筆)	表同五間五寸	裏幅同四間三尺五寸	坪数百六坪■合余	沽券金貳拾■分余
駒込片町	f1			表田舎間六間	裏幅表同断	坪数六拾九坪	沽券金九拾兩
	f2			表同拾間三尺三寸	裏幅表同断	坪数百貳拾壹坪	沽券金百五拾八兩壹分
	f3			表同四間	裏幅表同断	坪数四拾六坪	沽券金六拾兩
	f4			表同四間	裏幅表同断	坪数四拾六坪	沽券金六拾兩
	f5			表同六間	裏幅表同断	坪数六拾九坪	沽券金九拾兩
	f6			表同六間四尺五寸	裏幅表同断	坪数七拾七坪六合余	沽券金百三拾五兩
	f7			表同拾五間四尺八寸	裏幅表同断	坪数百八拾壹坪七合	沽券三百拾六兩
	f8			表同六間	裏幅表同断	坪数六拾九坪	沽券金百貳拾兩
	g1			表田舎間五間五尺五寸	裏幅表同断	坪数六拾八坪余	沽券金百拾八兩壹分余
	g2			表同八間	裏幅表同断	坪数九拾貳坪	沽券金百貳拾兩
	g3			表同八間	裏幅表同断	坪数九拾貳坪	沽券金百貳拾
	g4			表同七間貳尺	裏幅表同断	坪数八拾四坪三合余	沽券金百拾兩
	g5			表同六間壱尺四寸	裏幅表同断	坪数七拾壹坪六合余	沽券金九拾三兩貳分

小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	七右衛門						
小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	喜左衛門						
小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	五兵衛		家守	孫兵衛			
小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	八左衛門		家守	長吉	同	吉左衛門	
小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	重郎左衛門						
小間壱間二付金拾五兩	裏行同拾壱間三尺	裏行同断	地主	勘右衛門		家守	弥兵衛			
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	勘四郎	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	貞次郎		家守	善助	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	利兵衛		家守	善助	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	平七	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	八郎兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	平七	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	平七		家守	久右衛門	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	三右衛門	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	久兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	久兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間五尺	裏行同断	地主	七兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	伊右衛門		家守	宗右衛門	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	半兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	市郎右衛門	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	忠右衛門		家守	五兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	源七	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾八兩	裏行同拾壱間	裏行同断	地主	左平太	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	平兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	こん		家守	庄兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	伊右衛門	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	左兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	安兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	伊右衛門	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	市三郎	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	三左衛門	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	平兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	長兵衛		家守	九兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	次郎兵衛		家守	吉兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	伊右衛門		家守	甚兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	太兵衛	印(墨・角)					
小間壱間二付金拾貳兩	裏行同七間	裏行同断	地主	弥兵衛		家守	清八	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾壱間		地主	權三郎		家守	伊兵衛	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾六間壱尺七寸		地主	与五右衛門	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾六間壱尺七寸		地主	喜兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾六間壱尺七寸		地主	長右衛門	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾六間壱尺七寸		地主	惣右衛門	印(墨・菱)					
小間壱間二付金拾壱兩	裏行同拾六間壱尺七寸		地主	れん	印(墨・丸)	家守	長八	印(墨・丸)		
小間壱間二付金四兩	裏行同南二三間	裏北壱間	地主	左五兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金四兩			地主	六右衛門		家守	清左衛門	印(墨・丸)		
	裏行四間	裏行四間								
小間壱間二付金八兩	裏行同北ニテ壱間	裏行同南ニテ拾壱間三尺	地主	七兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金拾八兩貳分	裏行北ニテ拾間	裏行南ニテ同三間三尺	地主	喜右衛門		家守	半右衛門	印(墨・丸)		
小間壱間二付金拾八兩貳分	裏行同拾三間		地主	長兵衛	印(墨・丸)					
小間壱間二付金八兩	裏行同拾間三尺	裏行同断	地主	喜平治	印(墨・丸)					

	g6b			表同四間	裏幅表同断	坪数四拾六坪	沽券金六拾兩
	g6t			此地面之義は式ヶ所ニ而拾間式尺五寸有之、内式間四尺五寸は名主八左衛門草創之地面ニ而先規ヶ表之方、自身番屋有之候間尤古券ニは表間八間ニ而當時持主清七所持ニ御座候			
	g7			表同六間式尺五寸	裏幅表同断	坪数七拾三坪八合	沽券金九拾六兩三分
	g8			表同拾壹間式尺八寸	裏幅表同断	坪数百三拾壹坪八合余	沽券金百七拾貳兩
	g9			表同式拾壹間三尺	裏幅表同断	坪数百四拾七坪貳合余	沽券金三百貳拾貳兩貳分
	g10			表同四間	裏幅表同断	坪数四拾六坪	沽券金六拾兩
	g11			表同五間式尺貳寸	裏幅表同断	坪数六拾壹坪七合	沽券金八拾兩貳分
	h1			表田舎間六間	裏幅表同断	坪数七拾壹坪	沽券金百八兩
	h2			表同八間壹尺三寸	裏幅表同断	坪数九拾七坪貳合余	沽券金百四拾七兩三合余り
	h3			表同八間三寸	裏幅表同断	坪数九拾五坪貳合余	沽券金百四拾五兩
	h4			表同五間	裏幅表同断	坪数五拾九坪壹合余	沽券金九拾兩
	h5			表同六間四寸	裏幅表同断	坪数七拾壹坪七合余	沽券金百九兩余
	h6			表同拾壹間壹尺五寸	裏幅表同断	坪数百三拾貳坪九合	沽券金貳百貳兩余
	h7			表同八間式尺五寸	裏幅表同断	坪数九拾五坪五合余	沽券金百五拾壹兩貳分
	h8			表同七間壹尺四寸	裏幅表同断	坪数八拾五坪五合余	沽券金百三拾兩余
	h9			表同拾七間壹尺三寸	裏幅表同断	坪数貳百三坪六合余	沽券金三百拾兩
	h10			表同六間壹尺六寸	裏幅表同断	坪数七拾四坪壹合余	沽券金百拾貳兩三分余
	h11			表同七間	裏幅表同断	坪数八拾貳坪八合	沽券金百貳拾六兩
	i1			表田舎間拾壹間式尺六寸	裏幅表同断	坪数百三拾七坪貳合	沽券金貳百五兩三分余
	i2			表同四間壹尺五寸	裏幅表同断	坪数百五拾壹坪	沽券金七拾六兩貳分
	i3			表同七間六寸	裏幅表同断	坪数八拾五坪貳合	沽券金百貳拾七兩三分余
	i4			表同七間三寸	裏幅表同断	坪数八拾四坪六合	沽券金百貳拾六兩三分余
	i5			表同七間三尺貳寸	裏幅表同断	坪数九拾坪四合	沽券金百三拾五兩貳分余
	i6			表同七間	裏幅表同断	坪数八拾四坪	沽券金百貳拾六兩
	i7			表同八間五尺三寸	裏幅表同断・裏幅六間五尺三寸	坪数七拾貳坪壹間余	沽券金百六兩貳分余
	i8			表同八間四尺	裏幅表同断	坪数六拾坪六合余	沽券金百四兩
	j1	道幅四間		表田舎間九間三尺六寸	裏幅表同断	坪数六拾七坪貳合	沽券金百拾五兩余
	j2			表同六間九寸	裏幅表同断	坪数四拾三坪余	沽券金七拾三兩三分余
	j3			表同六間壹尺七寸	裏幅表同断	坪数四拾四坪	沽券金七拾五兩壹分余
	j4			表同四間四尺貳寸	裏幅表同断	坪数三拾貳坪九合	沽券金五拾六兩壹分
	k1			表同六間壹尺九寸	裏幅表同断	坪数四拾四坪貳合	沽券金七拾五兩三分余
	k2			表同拾貳間壹尺七寸	裏幅表同断	坪数八拾六坪	沽券金百四拾■(七)兩■分余
	k3			表同四間壹尺四寸	裏幅表同断	坪数貳拾九坪六合余	沽券金五拾兩三分余
	k4	道幅四間		表同拾壹間壹尺七寸	裏幅表同断	坪数七拾九坪	沽券金百三拾兩壹分余
	k5			表同拾間	裏幅表同断	坪数七拾坪	沽券金百貳拾兩
	k6			表同八間五尺八寸	裏幅表同断	坪数六拾貳坪余	沽券金百七拾七兩壹分余
	k7			表同六間式尺七寸	裏幅表同断	坪数四拾五坪壹合余	沽券金百貳拾兩
	k8			表同九間四尺五寸	裏幅表同断	坪数六拾八坪貳合余	沽券金三百兩
	m1			表田舎間拾四間式尺	裏行同六間	坪数百拾壹坪八合	沽券金百五拾七兩貳分余
	m2			表同壹間式尺	裏幅表同断	坪数五拾四坪貳合余	沽券金三拾六兩貳分余
	m3			表同壹間式尺	裏幅表同断	坪数五拾四坪貳合余	沽券金三拾六兩貳分余
	m4	道幅三間		表同三間	裏幅表同断	坪数四拾八坪八合余	沽券金三拾三兩
	m5			同三間四尺五寸	裏幅表同断	坪数六拾壹坪八合余	沽券金四拾壹兩分
	m6			表同拾三間式尺	裏幅表同断	坪数貳百拾七坪余	沽券金百四拾六兩貳分余
(浅嘉町)	m7	浅嘉町					
駒込片町	m8			表田舎間四間式尺		坪数九坪	沽券金拾七兩
	m9b			表同八間 内表五間半ニ裏行三間半 表貳間半ニ裏行八間壹尺八寸		坪数合四拾坪	沽券金三拾貳兩
	m9t1			表田舎間拾間		此坪四百坪 安政四巳年 壬五月十六日 屋敷御改 諏訪庄右衛門様御懸り 西尾寛一郎様 於御役所	
	m9t2			潮泉寺 成嚴ヶ		御帳戴御開濟被仰付候 尤代替并普請等之節 御届可致と被仰渡候事	
	m10			表拾四間		坪数八拾七坪五合	沽券金百拾貳兩
(浅嘉町)	m11	浅嘉町					
駒込片町	p1	道幅三間三尺		表田舎間拾八間五尺六寸	裏幅同式拾貳間	坪数貳百三坪五合余	沽券金三百五拾兩壹分余
	p2			表同四間	裏幅同七間	坪数七拾壹坪五合	沽券金七拾四兩
	p3			表田舎間六間七寸		坪数百拾三坪	沽券金四拾八兩三分余

小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ田舎間式拾壺間三尺	裏行北同断	地主御掃除之者頭	堀越九右衛門		地守	九兵衛	印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ同式拾壺間四尺	裏行北同断	地主御奥陸尺	梅田喜八郎		地守	小兵衛	印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ同式拾壺間	裏行北同断	地主御坊主衆	櫛田林蔵		地守	清左衛門	印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ同式拾壺間四尺五寸	裏行北同断	地主御留守居同心	平野奎之助		地守	七郎兵衛	印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ同式拾壺間三尺	裏行北同断	地主御坊主衆	渡部喜永		地守	庄次郎	印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ同式拾壺間四尺五寸	裏行北同断	箕浦寿玄上り屋敷			地守 同	小右衛門 五兵衛 左平次	印(墨・丸) 印(墨・丸) 印(墨・丸)		
小間壺間ニ付金拾兩	裏行南ニテ式拾壺間五尺	裏行北同断	地主小普請	岡万之丞		地守	与兵衛	印(墨・丸)		



丸山新町	q1	道幅三間三尺	拝領地(朱筆)	表田舎間七間三尺	裏幅表同断	坪数百六拾壹坪貳合余	沽券金七拾五兩	
	q2		同 (朱筆)	表同五間貳尺五寸	裏幅表同断	坪数百六拾壹坪貳合余	沽券金七拾五兩	
	q3		同 (朱筆)	表同五間三尺五寸	裏幅表同断	坪数百拾坪貳合	沽券金五拾貳兩貳分	
	q4		同 (朱筆)	表同四間三尺三寸	裏幅表同断	坪数九拾八坪九合余	沽券金四拾五兩貳分	
	q5		同 (朱筆)	表同四間四尺	裏幅表同断	坪数百坪三合	沽券金四拾六兩貳分余	
	q6			表同貳拾六間四尺五寸	裏幅表同断	坪数五百八拾坪余	沽券金貳百六拾七兩貳分	
	q7		拝領地(朱筆)	表同貳拾六間四尺五寸	裏幅表同断	坪数六百拾九坪六合余	沽券金貳百八拾三兩三分余	
(白山前町)	r1	白山前町						
	r2	白山前町						
(御数寄屋町)	r3	御数寄屋町						
武家地	B1	松平加賀守様	寺社地・門前町屋	J1	大恩寺			
	B2	森川金右衛門		J2	願行寺			
	B3	水戸様		J3	浩妙寺			
	B4	小笠原信濃守様御下屋敷		J4	少林寺			
	B5	進喜太郎様御組屋敷		J5	淨泉寺			
	B6	玉井平十郎		J6	法林寺			
	B7	嶋田八十之助		J7	長元寺			
	B8	御書院本多播磨守様御組屋敷		J8	大林寺			
	B9	伊藤若狭守様御下屋鋪		J9	専西寺			
	B10	太田備仲(中)守様御下屋敷		J10	十方寺			
	B11	嶋田左衛門		J11	麟祥院領町屋			
	B12	武井万之助		J12	麟祥院領三ツ家町			
	B13	平岡□(与ヵ)右衛門		J13	正行寺			
	B14	御先手山高八左衛門様御組屋鋪		J14	正行寺門前町家			
	B15	御書院本多播磨守様御組屋敷		J15	大圓寺			
	B16	御先手石丸藤蔵様御組屋鋪		J16	大圓寺			
	B17	阿部伊勢守様御下屋鋪		J17	裏門地借り添建家			
	B18	堀三左衛門様御組御徒衆		J18	麟祥院領町家			
	B19	橋本大炊頭様御組御徒衆		J19	大圓寺門前町家			
	B20	阿部伊勢守様御下屋鋪		J20	潮泉寺			
	B21	小池源七郎		J21	正念寺			
	B22	高橋清次郎		J22	徳性寺			
	B23	片岡権兵衛		J23	淨心寺			
	B24	早川七十郎		J24	淨心寺門前町家			
	B25	館(カ)九八郎		J25	常検寺			
	B26	山田源内		J26	龍光寺			
	B27	権田又四郎						
	B28	武士方入込						
	B29	御先手大嶋織部様御組屋鋪						
	B30	入口						
	B31	御先手鈴木作太夫御組屋敷						
	B32	御持堀因幡守様御組屋敷						
	B33	星野長兵衛						
	B34	福嶋喜右衛門						
	B35	白須辰次郎						
	B36	鈴木治右衛門						
	B37	植林采女						
	B38	米田数馬						
	B39	柴田金右衛門						
	B40	武士方入込						
	B41	土井大炊守様御下屋敷						

座候二付、隣町沽券積りを以相考書上申候、其外絵図面町人所持屋敷沽券之儀<sup>者</sup>、凡当時町並之売買之積りを以平均書上申候、銘々地主共所持仕候沽券證文之金高慶長金・元禄金・乾金・享保文字金入交り有之、時々売主買主相對二而高下御座候、絵図面之金高<sup>者</sup>少々相違御座候  
(後半)  
延享元年

子三月

駒込追分町	
月行事 平兵衛	㊦
同九軒屋敷	
同 仁兵衛	㊦
同丸山新町	
同 与兵衛	㊦
同片町	
月行事 長兵衛	㊦
同 宇右衛門	㊦
同 八郎兵衛	㊦
同 惣右衛門	㊦
名主 八左衛門	

この文言は、幕府が指示した拝領町屋がある町の場合の文言とほぼ同文である。町役人の連印は揃っているが、名主の捺印はない。家守・地守・居付地主の印鑑については、追分町のcE21(地主広瀬弥五郎)の地守清兵衛のみ欠いている。また、本図の記載対象の駒込追分町・駒込九軒屋敷・丸山新町・駒込片町は、名主山下八左衛門の当時の支配町に該当する。<sup>36)</sup>

cE21が無印である理由は不明だが、cE21の地主ないし家守の所蔵

とは考えにくい。おそらく本沽券図は、延享元年に正本と同時に作成された町名主(山下)八左衛門の控と考えられる。なお、現所蔵館が二〇〇三年に古書店より購入する以前の伝存経緯については不明であるが、旧蔵者のラベルで「山下あい」の記載があり、「明治二巳年七月中」(表5b10x)の張紙が付されていることから考えて、町名主の家で維新後も機能していた史料である可能性が高い。

図10表5には、トレース図と記載を示した。以下、四町について、地割、地主、家守・地守、地価について検討していこう。

(2) 1 駒込片町 (b1 10 / d2 6 / f1 8, g1 11, h1 11, i1 8, j1 4, k1 8, m1 6, m8 10, p1 3)

駒込村内で起立した町としては、最大の町で、四町のうち、唯一売買が許される通常の町である。幕末の『諸問屋名前帳』によれば、炭薪仲買八人、春米屋九人、地廻り米穀問屋・脇店八ヶ所組米屋各三人、三組両替屋一人、両替屋五人、紺屋二人、地掛蠟燭屋一人、人宿二人、豆腐屋触次世話人一人が、また『八品商名前帳』によれば八品商のべ一一九人居住し、うち二〇人が家持であった。とくに職種に特徴はないが、下り物問屋が存在していない点で、場末の町の一つのありようを示しているといえる。

駒込片町はその名の通り片側町で「惣間数田舎間五百九拾壱間七寸、惣坪数六千四百三拾式坪壱合、沽券金合テ八千八百七拾三両三分」であるが、bは日光御成道(S1「本郷通り」)の北に並行する道S5に、d k pは中山道(S2 S10)沿いに、m1 6はS13小石川通り沿いに、m8 10は中山道と小石川通りの交差から北東に延びるS15「王子通り 駒込新道」道沿いに、それぞれ散在している。これは、町の起立によるものである。<sup>36)</sup>片町の住民八〇人は、従来は百姓として駒込村に居住していたが、慶長年中から寛永年中に田畑が御用地・大名屋敷・武

家屋敷・寺領・寺院の境内として召し上げられてしまい、生業を失ってしまったため、「奥州海道」と中山道の両口で「御早符元」となり、「慶長年中奥州御陣」の際に江戸城まで度々「御状早符使」を勤めた由緒を申立てて寛永年中に駒込片町の地を確保したという。また、天和大火後にはふたたび幕臣の屋敷や大縄拝領地の候補地となったが、同様に「御早符」と賄役の負担を根拠に土地をとり戻したとしている。寛永年中の段階で八〇人の百姓が「及鍋命」<sup>(堀力)</sup>ほど土地の収公が行われたかどうか確認できないが、別稿で明らかにした寺社地・武家地・幕府施設の成立過程から、少なくとも天和二（一六八三）年の大火後までに行われた土地の移動が百姓から土地を奪ったのは確実である。彼らの一部は、生業を転換せざるをえなかったであろう。<sup>(38)</sup>根津権現の氏子町では片町には下組・中組・上組・竹町組が存在したが、最北端の「竹町横町」は天和大火後には成立している。<sup>(39)</sup>こうして街道沿いのうち武家拝領地と寺社以外の空間に集住が進んだ結果、散在した形態をとることになったと考えられる。

まず、bの一〇筆は、若干の歪みがあるものの、b1・b2を除き、ほぼ同じ奥行の矩形である。小間高については、b10が三両で、他はすべて一〇両である。b10のみ安価なのは、旗本屋敷（B6）と門前町屋のない寺（J2）に挟まれていることであろうが、何よりも御家人の拝領町屋敷であるためであろう（「拝領地」）。拝領町屋敷は通常の町屋敷よりも安く見積もられている可能性が高い。その反面、b2は角屋敷であるが、価格への反映はみられない。一〇筆のうち家守がおかれている屋敷も三筆にすぎず、七筆が居付地主である。これは、裏通りの片側町で土地利用が低調だったためと推測しておきたい。なお、b10のみが「地守」と表記されているが、後述の他町もいずれも「地守」と表記されているように、拝領町屋敷の場合は「地守」であった。

次にdの五筆は、いずれも不整形で、小間高は角屋敷のd2が一二両

五分、日光御成道に面したd3・4が一二両、中山道に面したd5・6が二〇両である。また、d5は家守をおいている。日光御成道（本郷通り）よりも中山道に面した屋敷の方が小間高が高く、また不在化が進んでいると推測される。

fよりkは中山道に面した矩形の屋敷であるが、小間高に微細な差が見られる。

f1～5の五筆とg2～11の一〇筆は一五両であるのに対して、f6～f8・g1の四筆は二〇両となっているが、その背景は不明である。また一九筆のうち、地守・家守がおかれるのは八筆である。g9は間口が広く、家守が二名おかれる。なお、g6については、付箋が付けられ、「此地面之義は式ヶ所二而拾間式尺五寸有之、内式間四尺五寸は名主八左衛門草創之地面二而、先規分表之方<sup>江</sup>自身番屋有之候而、尤古券二は表間八間二而當時持主清七所持二御座候」とあり、g6・g7の屋敷について、名主八左衛門の草創の地面二間四尺五寸と清七の地面八間から地割が変更されたことを示している。

h1～11の一筆は矩形ですべて小間高が一八両、三筆が家守をおいている。注目されるのは、平七がh4・6・7の三筆、久兵衛がh9・10の二筆を所持していることである。おそらく隣接した屋敷は、実際には一体化した利用が行われていたと考えられる。

i1～8の八筆は、i1～6が小間高一八両、i7・8が一二両となっている。これは二屋敷の奥行が短いためであろう。家守をおいているのは二筆である。

j・kの一二筆のうち、j1～4とk1～5は小間高一二両、k6・7は二〇両、k8は三〇両三分で、本沽券図の中で最も高い価格となっている。S12と交差する角屋敷であるためであろう。家守をおく屋敷は四筆である。

m・pの一三筆（m1～10とp1～3）については、家守をおく屋敷

は四屋敷である。S13に面するm1～6は一一両、S15に面するm8～9は四両、m10とp3は八両、中山道に面するp1・2は一八両二分である。

このように、駒込片町の町屋敷は散在し、場所によって小間高四両から三〇両と大きな差が見られた。格差の要因として考えられるのが、面した道路である。一五両以上の屋敷はいずれも中山道沿いであり、これについてS13小石川通り、日光御成道となり、S15と日光御成道に並行した北の道(S5)は評価が低かったと考えられよう。日光御成道は奥州道(日光道中)附属の幕府の公道であるが、中山道よりも交通量が少なかったことが可能性として考えられる。また、麻布本村町と同様に、角屋敷の価格が特になくなっていない点も注目される。不在地主の少なさも含め、当該地域は土地の売買が低調で、地価も低かったことがうかがわれる。

本沽券図に記載された残る三町は、いずれも売買ができない拝領町屋敷である。さきの本沽券図の文言にみるように、拝領町屋敷の沽券高は、近隣の町屋敷を参考に設定されるため(「隣町沽券積りを以参考書上申候」)、この片町が一つの基準となったと考えられる。

## (2) 1 2 駒込追分町(cE1～25, cW1～22)

追分町は日光御成道の両側に展開した町で、幕末の『諸問屋名前帳』によれば、炭薪仲買三人、春米屋三人、脇店八ヶ所組米屋一人、両替屋一人、紺屋一人、地廻り酒問屋一人、地掛蠟燭屋一人が、また『八品商名前帳』によれば八品商のべ二五人居住していた。地廻り酒問屋・地掛蠟燭屋は小売・仲買から成長した大店高崎屋長右衛門<sup>(40)</sup>であるが、基本的には駒込片町と同様、下り物問屋のみられない、場末の町のありようを示しているといえる。

町は、東側二五筆、西側二二筆からなる。朱筆で「拝領地」と記され

ているように、すべて拝領町屋敷であり、地主はいずれも御家人である。ただし、「町方書上」・「御府内備考」によれば町の成立時の拝領者は小人四八人であった。したがって、筆数は一筆少ないため、合筆が行われたと考えられるが、標準と思われる一三七坪五合の倍数の屋敷は存在せず、東側北隅(cW22)、西側南隅(cE1)・北隅(cE25)の面積が大きいものの、確定はできない。なお、隅の屋敷はcE1以外は角屋敷ではないため商売上有利にはならないが、敷地が広いいため、頭クラスに割渡された可能性もある。

また、地主については、「町方書上」の記述によれば成立当初はすべて小人であったが、この沽券図の時点では変化が生じている。「拝領地」の「同」の記載の向きから、東側は北から、西側は南からの順となり、これに従えば、西側cW18～22の五筆は小普請、東側cE16は駕籠頭、cE10・15は小普請となる。計四七筆のうち八筆にすぎないが、拝領者の変化として注目しておきたい。

町屋敷の管理、および地主に代行して町役を務める家守は、「地守」と表記され、すべての屋敷に付けられている。拝領町屋敷は地主が御家人であるため売買が行えなかったが、連続する屋敷を一人の家守が兼ねている例が三例みられることから考えて(cW15～17清右衛門、cE12・13宇右衛門、cE18・19三左衛門)このほか名前が一致する者があるが、印文より別人である)、おそらく地守の権利が売買され、このように地守自身が屋敷を併合して利用していた可能性が想定されよう。

設定された小間高については、西側ではcW1～15が金四両、cW16～22が三両となっている。一方東側もcE2～17が金四両、cE18～25が三両、角屋敷であるcE1のみが五両となっている。おおよそ江戸から三分の二ほど入ったところの町屋敷から評価額が下がっており、追分町の場合は、江戸に近いほど、地価が評価されていたことがわかる。ただし、当該地域中でも、当町は低額である。当町が同じ拝領町屋敷であ



る丸山新町・九軒屋敷よりも低額だった理由として、さきに指摘したように、中山道の優位性が考えられる。当町の場合、一九世紀に至っても御家人が居住している場合があるが、これは地価が低かった結果と考えられる。

(2)―3 駒込九軒屋舗 (eE1~E5、eW6~9)

駒込九軒屋敷は、中山道の展開する両側町で、幕末の『諸問屋名前帳』によれば、春米屋三人、両替屋三人、人宿一人が、また『八品商名前帳』によれば八品商がのべ七人居住していた。下り物問屋の居住しない、場末の町のありようを示しているといえる。

町はその名の通り、拝領町屋敷九筆で構成される。「町方書上」によれば、東側は駒込村百姓地が元和四(一六一八)年七月中に幕府の小人・中間五人に、西側は小石川村百姓地が阿部対馬守(重次 岩槻藩)の拝領地になった(年月不明)後、元禄年中に上り地となった上で、御家人四人に渡された。屋敷はいずれも間口は田舎間で、敷地が不整形であるが、小間高はすべて五両である。西側・東側ともとくに条件の差がなかったためであろう。同じ拝領町屋敷である駒込追分町よりわずかながら小間高が高いのは、中山道と日光御成道という、面する街道の交通量の違いと推測される。御家人の地主のうちeE3のみは二人となっている。また、すべての屋敷に地守がおかれているが、追分町と同様に、地守の権利の形で土地を使用権が売買されていた可能性がありうる。

(2)―4 駒込丸山新町 (q1~q7)

丸山新町は、中山道に面した片側町で、幕末の『諸問屋名前帳』によれば、春米屋一人、両替屋一人が、また『八品商名前帳』によれば八品商がのべ九人居住していた。ほかの三町と同様、下り物問屋の存在しない、場末の町のありようを示しているといえる。

町は、七筆の拝領町屋敷で構成される。九軒屋敷の東側と同様に、小石川村百姓地が阿部重次の拝領地になった(年月不明)後、元禄年中に上り地となった上で、御医師ほか七人に渡された。町名の由来は、「丸山御屋敷」と称していた阿部の拝領地(「中屋敷」)に起立したことによるという。寸法はいずれも田舎間で、奥行は二間より二間四尺でおおよそ形も矩形である。北側のq6・7が面積が広い。小間高は一〇両となっており、同じ拝領町屋敷である駒込追分町、九軒屋敷よりも設定額が高い。地主はいずれも御家人で、地守が付けられており、追分町・九軒屋敷と同様に、権利が売買されていたと考えられる。なお、q7のみは地守が三人となっている。この時点で拝領主である箕浦寿玄が上地されて無主になっていることに起因するのかわからない。なお、『寛政重修諸家譜』によれば、「小兒科の医」の「箕浦玄寿」の三代目が享保五(一七二〇)年五月一日に居宅より失火し、病氣のため逃げ遅れて死亡、その子寿庵は父を救えなかったことをとがめられて「追放」になったという。そして、「御府内備考」によれば、この屋敷は享保五年五月に上地となり、文政九(一八二六)年段階も上り屋敷のままで「上納地」となっている<sup>(42)</sup>。

以上、本沽券図に記載された四町について検討してきた。

沽券図の記載でまず指摘すべきことは、当該地域の沽券高の低さである。さらに、当該地域においては、町内、あるいは町相互で微細な小間高の差異がみられた。追分町で見たような江戸中心部との距離や、角屋敷と中屋敷という差に起因する場合もあったが、より価格に影響したのは面する道路の評価だったと考えられる。

なお、近代に入ると、延享沽券図と異なり、屋敷ごとの地価の差が生まれている。追分町の場合、基本となる一三七・五坪の町屋敷は、延享沽券図では江戸よりの南部分の一六両三步と、北部分の一三両二歩に分かれていたが、明治沽券図(六大区沽券図)<sup>(43)</sup>では、ほとんどが下落して

いる。会議所付の土地は固定で一〇円で、そのほかの土地は二・七五円（c E 12）を最低としておおむね六〜八円である。こうした中で、江戸の大店として成長した高崎屋長右衛門<sup>(45)</sup>の所有になったc W 5・c W 7・c E 5・c E 6は三〇円、c E 一〇は四〇円と突出しており、面積が半分の25番地（W 1の一部）でも二二円、さらに面積が二倍の7番地（c E 7・8）と二・五倍の26番地（c W 1の一部・c W 2・c W 3）は一〇〇円となっている。また、高崎屋の所持地の狭間のc W 4が一五円、c W 6が一二円、c E 9が一三円であり、これらの土地も高崎屋が利用していた可能性があろう。売買が許されなかった拝領町屋敷であるが、大商人の経済活動によって、実質的な地価は上昇していたのである。

## おわりに

本稿では、近年存在が確認された沽券図も含め、あらためて集成、類型化を行った上で、新出の沽券図のうち、中心部の日本橋南地域の町（万町）、中心部からやや南に下った主要街道沿いの古町（芝神明町）、朱引にかかる場末の町（麻布本村町、駒込片町ほか三ヶ町）の、四点の沽券図をとりあげ、検討を行った。

まず、主要な沽券図の小間高（表6）も合わせて、それぞれの地域ごとの町屋敷売買の状況をまとめたい。

万町は、主要街道である日本橋通り（東海道）から横町にあたる。日本橋地域での微細な差とともに、正徳沽券図から延享沽券図の間の小間高の値上がりを確認することができた。

芝神明町については、寛永期の段階で間口五間屋敷が「江戸小判」一八〇両で売買されていることが確認できた。同時期の日本橋北地域の河岸付の一等の町、伊勢町の角屋敷（間口京間六間）は九三〇両、中屋敷（間口二間四尺八寸七分半）が三六〇両で売買されていることから考えればきわめて安価である。しかし、沽券図作成段階の日本橋地区の小

間高は、メインストリート（本町通り・日本橋通り）や河岸付きの町では角屋敷で約三〇〇〜七〇〇両、中屋敷で約二〇〇〜三〇〇両、また裏通りで角屋敷一〇〇両・中屋敷六五〜八〇両である。したがって、正徳沽券図の段階の沽券高でも、延享沽券図の日本橋地域の裏通りの町と同程度の小間高であった。また、芝神明町の地価も寛永期より二倍以上も上昇しており、町屋敷の売買が進展していたことをうかがわせる。日本橋通り（東海道）沿いの京橋地域の小間高と比較すると、京橋南地域の出雲町や芝口北紺屋町の中屋敷程度となっている。日本橋通りについては、日本橋に近づくほど小間高が上昇する傾向が指摘されており、これに接続する通り沿いの町も、おそらく同様の傾向があったと考えられる。<sup>(47)</sup>

主要街道に並行した道・広小路と外堀に面した二葉町の場合、拝領町屋敷がほとんどを占めるものの、正徳沽券図ではとくに外堀に面した北側が芝神明町の西側とほぼ同じ小間高を示している。芝地域で条件のよい町の場合、おおよそ日本橋地域の裏通り、あるいは京橋地域の大通りの中屋敷と同等の小間高だったと考えられる。

また町内においては、東側よりも西側で小間高が高くなっており、地主の不在化は東側で展開していた。土地は売却しながらも店舗経営を続けた煙管屋の例などから考えて、西側が繁華街を形成した結果、地主が安定した商売を行い、居付地主が多く展開していた可能性がある。なお、江戸城外堀から甲州街道およびその裏通りを西に展開する四谷伝馬町・塩町の場合、外堀に近い町はほぼ芝地域と同額で、西に向かうほど小間高が低くなること、角屋敷は小間高が高いことが指摘できよう。

一方、場末の町の沽券図の二点のうち、「駒込追分町・同九軒屋鋪・同丸山新町・同片町沽券図」は駒込片町以外はすべて拝領屋敷であるが、日本橋・京橋、さらに芝地域と比べて、小間高が圧倒的に低いことが確認できる。こうした小間高の差は、駒込追分町でみたように、近代の地券発行時の地価にも影響が及んだ。このように、場末の町の町屋敷の評

表6 沽券図にみる各町小間高の比較

通り	町名	角屋敷(両／間)	中屋敷(両／間)	出典の種類
本町通り	大伝馬町一丁目	500	300	Ⅱ 1
	大伝馬町二丁目	330	220	Ⅱ 1
	通旅籠町	290	210	Ⅱ 1
	横山町二丁目	150	80	Ⅱ 5
本石町通り	小伝馬町一丁目	170	90	
	小伝馬町二丁目	170	85	
日本橋通り	通一丁目(東側)	400・360	260	Ⅱ 6
	(西側)	510・320	260	
	通二丁目	300～350 新道 240	200～250	Ⅱ 6
	万町	310	200	Ⅱ 4
伊勢町堀	小舟町一丁目	726	260	Ⅱ 5
		400		
	小舟町二丁目	400	240～255	Ⅱ 5
	小舟町三丁目	714	250	Ⅱ 5
日本橋川	小網町一丁目	346	165	Ⅱ 2
		306		
	小網町二丁目	370	300	Ⅱ 2
	小網町三丁目	400	240～300	Ⅱ 2
堀留町入堀	堀江町一丁目	480	160～200	
		308		
	堀江町二丁目	480	160～200	
		308		
	堀江町三丁目	416	200	
		220		
	堀江町四丁目	228	—	
	新材木町	180	150	
茸屋町高砂通り	茸屋町	200	175	Ⅱ 5
	堺町	200	160	Ⅱ 3
		180		
	新和泉町	169	149	Ⅱ 1
		159	120	
	高砂町	120	100	Ⅱ 1
住吉町難波町通り	住吉町	100	80	Ⅱ 1
	難波町	95	75	Ⅱ 1
		92	65	
京橋北(日本橋通り沿い)	南伝馬町一丁目 *	180・200・(300)	130	I
	南伝馬町二丁目 *	190・200	130	I
	南伝馬町三丁目 *	170・200・(250)	130	I
	南鞘町 *	150	95・100	I
	南塗師町 *	150	90・100	I
	松川町一丁目 *	90	70	I
	松川町二丁目 *	90	60	I
京橋南(日本橋通り沿い)	新両替町一丁目(東側)	225・255	205～225	
		(西側)		
	新両替町二丁目(東側)	270.3	125～282	
		(西側)		
	新両替町三丁目 東側	165～180	140～150	
	新両替町四丁目	148	115	
	尾張町一丁目 新地	86～148	74～107	Ⅱ 2
	尾張町一丁目 元地	83～130	63～109	Ⅱ 1
	尾張町二丁目	180・200	120・130	Ⅱ 1
	出雲町	140～155	110	Ⅱ 1
	芝口北紺屋町	145・147・208	109・122	

京橋地域裏通り	弓町	109・120	90～100	Ⅱ 1
神田	雉子町	84.5	70.3	Ⅱ 2
	三河町三丁目	139.7	94.1	Ⅱ 2
	三河町四丁目	140	83.4	Ⅱ 2
	四軒町	65	52.6	Ⅱ 2
	三河町三丁目裏町※	-	55	Ⅱ 2
	三河町四丁目裏町※	-	63.3	Ⅱ 2
芝	★二葉町(北側) *	150・120	100	Ⅰ
	(南側) *	100・80	50	
	芝神明町(東) *	105	80	Ⅰ
	(西) *	120	100	
四谷	四谷塩町一丁目	120.25(+銀1匁8分)・ 118.5(+銀1匁8分)・ 100.25(+銀9匁4分)・ 105.5(+銀7匁5分)	約50～60	Ⅱ 1
	四谷伝馬町一丁目	120.84(+銀7分2厘)・ 85・95・95	約30～60	
	四谷新伝馬町一丁目	65・65(+銀8匁8分)	44～45	
	四谷伝馬町二丁目	65・65・60・55	約45	
	四谷伝馬町三丁目	50・50	約37～38	
	四谷塩町二丁目	45・40	約27	
	四谷塩町三丁目	25・30	約20～25	
麻布	麻布本村町(上ノ町)		12～16	Ⅱ 5
	(谷戸町)		5～12	Ⅱ 5
	(仲町)		11～12	Ⅱ 5
	(御殿新道・南之方三ヶ町)		1.5～12	Ⅱ 5
駒込	駒込片町(b)	10	10・3(註1)	Ⅱ 2
	駒込片町(d) 中山道沿い※	-	20	Ⅱ 2
	駒込片町(d) 日光御成道沿い	21.5	12	Ⅱ 2
	駒込片町(f)	20	15・20	Ⅱ 2
	駒込片町(g)	20	15	Ⅱ 2
		15		
	駒込片町(h)	18	18	Ⅱ 2
	駒込片町(i)	18	18・12	Ⅱ 2
		12		
	駒込片町(j)	12	12	Ⅱ 2
	駒込片町(k)	12	12・20	Ⅱ 2
		30.75		
	駒込片町(m)	11	11	Ⅱ 2
	駒込片町(p)	4	4	Ⅱ 2
	★駒込追分町(東) (西)※	5	3・4	Ⅱ 2
		-	3・4	Ⅱ 2
	★駒込九軒屋敷 ※	-	5	Ⅱ 2
	★丸山新町	10	10	Ⅱ 2

玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』、近世風俗研究会、1977年、第一編表2-1、第二編表1-2、および吉田悠子「学習院大学図書館所蔵『享保神田古地割書上図』について」『学習院女子大学紀要』第13号、2011年、表五、に加筆。

註1 1屋敷(図8b10)のみ3両

★拝領町屋敷(二葉町は12筆のうち11筆が拝領町屋敷)

※角屋敷のない町。

\*正徳沽券図



価額は非常に低かったが、微細な差ではあれ、各町間、さらに町内で小間高の価格差がみられる点にも留意したい。駒込追分町の場合は、町内で江戸との近さで二つの小間高設定が行われていたが、他の町内や町同士の価格差は、むしろ角屋敷よりも、面した通りによって広がる傾向がみとめられた。この点は、麻布本村町でも同様であり、玉井が明らかにした日本橋・京橋の状況と同じく道路の評価が価格に反映する一方、角屋敷はそれほど考慮されていない、という場末の状況が指摘できよう。また、拝領町屋敷は売買禁止であったが、管理人である「地守」が広範に存在しており、地券発行時には町内での価格差の存在が表出している。中心部に比べ、低調ではあったが、それでも売買が展開していたことがうかがえよう。一方、麻布本村町の場合、小間高を他の沽券図ではみられない「××両券」と表記しており、すでに延享沽券図の段階で沽券状況「売券、つまり売買を意識した表記となっていた」。

以上、本稿では個々の新出の沽券図の検討によって、従来未検討だった江戸の町屋敷売買の地域差を明らかにすることができた。今回の事例でみる限り、基本的に土地の価格は道路の経済的な評価に規定されて町間で差があらわれたが、町内の角屋敷と中屋敷の差は場末ではあまり生じなかったのである。では、最後に、沽券図の作成経緯から、堺大絵図との比較をこころみたい。

注目したいのは、芝神明町の正徳沽券図にみられる間口の「不足地」「延地」の表記、および麻布本村町の延享沽券図で断り書きがなされた坪数と間口の誤差である。まず明らかなのは、元の図ないし「水帳」の存在である。これは、玉井が明らかにしたように、先行して土地の丈量の記録があったことである。そして、後者の具体的な数値は不明であるが、土地区画に変動があった点が注目される。沽券図の記載の最大の目的は売買の実態把握にあったわけだが、実際には検地の役割もあったといえよう。駒込片町でも、地割の変更が示唆されている。こうした

一七世紀における微細な区画割の変更は、土地の売買にかかわって問題となることが想定される。<sup>(48)</sup> 史料の限界を考えれば、今後、近世考古学による町人地調査での説明が期待されるところである。<sup>(49)</sup> ただし、麻布本村町については坪数は変更されず、水帳に準拠している。これは、役負担と小間高の算出には坪数よりも間口が重要だったためであろう。芝神明町が特記する変更点も間口にかかわるもののみであった。堺大絵図と江戸の沽券図は、記載項目で共通するものが多いが、屋敷の丈量においては、前者が間口×奥行、坪数を重視したのに対して、後者では間口が重視されたわけである。作成方針には、両都市の歴史的経緯や都市社会の経済状況が反映されていたのである。

堺大絵図は、現存する町屋敷レベルの情報を子細に示した絵図としては、古いものである。堺大絵図を基点として他都市の同種の記載を持つ絵図との比較検討をすすめていくことで、さらに役負担や町屋敷売買という都市社会のそれぞれの状況を明らかにすることも可能であろう。今回の共同研究の詳細な検討は、堺大絵図の研究の深化のみならず、こうした比較研究の道をも拓いたと考える。

## 註

- (1) 朝尾直弘「元禄二年堺大絵図を読む」〔朝尾直弘著作集〕第六巻、岩波書店、二〇〇四年、初出は一九七七年。
- (2) 玉井哲雄「江戸町人地に関する研究」、近世風俗研究会、一九七七年。
- (3) 松澤正樹「三都役者評判記の成立とその背景―和泉屋版『鑑もの』を中心に」〔『論究日本文学』六二、一九九五年〕、岩淵「江戸の大発展が「三都」を生んだ」〔『週刊 新発見! 日本の歴史』三〇号、朝日新聞社、二〇一四年〕。
- (4) 日本橋地域〔野本淳「日本橋通二丁目新道・式部小路」とその周辺〕「日本橋二丁目遺跡」〔日本橋二丁目遺跡調査会、二〇〇〇年〕、岩淵「延享元（一七四四）年「万町沽券絵図控」の検討」〔日本橋二丁目遺跡、日本橋二丁目遺跡調査会ほか、二〇〇三年〕、芝地域〔杉森玲子「江戸二葉町沽券図と大奥女中の町屋敷拝領」『日本歴史』六七、二〇〇四年〕、外神田の名主斎藤家の支配町六町分の沽券絵図〔吉

- 田悠子「学習院大学図書館所蔵『享保神田古地割書上図』について」『学習院女子大学紀要』第二三号、二〇一一年、駒込地域〔岩淵〕駒込追分町の空間と住民」『駒込追分町南遺跡』、文京区教育委員会、二〇一二年）がある。
- (5) 慶應義塾大学三田メディアセンター蔵幸田文庫一二五―四八。幸田文庫は、慶應義塾大学が、同大学教授であった日本経済史の研究者幸田成友が収集した史料を入手したもので、同史料は一九六三―六五年の受け入れである。幸田の入手先や経緯は残念ながら不明である。この絵図については、前掲岩淵「延享元（一七四四）年『万町沽券絵図控』の検討」の分析をもととする。
- (6) 東北大学附属図書館蔵狩野文庫三―八七八―一。
- (7) 港区立港郷土資料館蔵。
- (8) 国立歴史民俗博物館蔵。
- (9) 前掲玉井書のほか、『中央区沿革図集』『日本橋編』『京橋編』『月島編』『中央区立京橋図書館、一九九四―九六年〕が現中央区域の沽券図を集成し、主要なものを紹介している。
- (10) 前掲玉井書。
- (11) 滝山町〔国立国会図書館蔵旧幕府引継書八一九―一七六〕・数寄屋町四丁目絵図（同八一九―一七三）は地代引き下げ令の際の町屋敷数、竹島町外絵図（同八一九―一七九）は拝領屋敷の寸法・坪数の調査、また「組与力同心大縄屋鋪図」「同八一九―一二四）は大縄拝領地の敷地割りと所持者を示した図であるため、沽券図とは性格が異なると判断し、除外した。
- (12) これらの作成経緯も興味深い、機会を改めて紹介したい。
- (13) 『江戸町触集成』第三巻、塙書房、一九九五年、四二六―。
- (14) 東京都江戸東京博物館蔵。
- (15) 『江戸町触集成』第五巻、塙書房、一九九六年、六六六―。
- (16) 前註六六六五。
- (17) 前掲野本淳「日本橋通二丁目新道、式部小路」とその周辺、岩淵「延享元（一七四四）年『万町沽券絵図控』の検討」。
- (18) 『日本橋二丁目遺跡』（日本橋二丁目遺跡調査会、二〇〇一年）。ただし、国文学研究資料館寄託白木屋文書の通二丁目沽券絵図写は、地主・家守の記載から天明七（一七八七）年九月、寛政四（一七九三）年作成のものであるため、伴道雄『伴家史』近世編（一九七七年）所収の沽券図写を用いた。同図は地主・家守の記載から寛保元（延享元年）（一七四一―四四）の作成であり、おそらく延享沽券図の写と推定される（『近世中・後期江戸の「家守の町中」』『都市と商人・芸能民―中世から近世へ―』山川出版社、一九九三年）。なお、白木屋文書の沽券絵図の沽券金は、西側北角屋敷の沽券高・小間高が異なるほかは、伴家文書の絵図と一致する。
- (19) 「江戸鹿子」〔朝倉治彦監修『古板地誌叢書』八 すみや書房、一九七〇年所収〕。
- (20) 吉田伸之「町人と町」〔吉田伸之「近世都市社会の身分構造」、東京大学出版会、一九九八年、初出は一九八五年〕。
- (21) 「江戸鹿子」。
- (22) 「国花万葉記」〔朝倉治彦監修『古板地誌叢書』三 すみや書房、一九七〇年〕。
- (23) 花咲一男編『諸国買物調方記』、渡辺書店、一九七二年。
- (24) 小池章太郎編『江戸砂子』東京堂出版、一九七六年、三七二頁。
- (25) 野口孝一氏が紹介した近代の聞き書きには、京橋の大根河岸に面した角地にあった棒屋の記述がある。この棒屋は「天秤棒、しんぱり棒、槍の棒、重量物運搬用のテコ棒、コロ棒、太鼓のバチ棒、槌・斧の柄」など「大小さまざまな棒」を扱っており、「ここには大根河岸の青物市場があり、棒に縁のある人々が集まってきたために繁盛した」とされている（野口孝一『明治の銀座職人話』、青蛙房、一九八三年、九九頁 野口氏のご教示による）。万町の棒屋の詳細は不明であるが、天秤棒等の販売といった点で近辺の元四日市広小路や江戸橋広小路との関係も想定されよう。同書は銀座四丁目の葛籠屋秋田屋の五代目当主が晩年に、銀座を追想して書いたメモをもとにしたもので、明治三六・七年より大正初年ごろの銀座が記述されている。
- (26) 岩淵「錦絵の町 神明前」〔錦絵はいかにつくられたか〕国立歴史民俗博物館、二〇〇九年）、岩淵「江戸藩江戸勤番武士の日常生活と行動」〔国立歴史民俗博物館研究報告〕一三八、二〇〇七年）ほか。
- (27) 「町方書上」。正徳沽券図より高額となっているが、この場合の「小判」の価値については、今後の検討課題としたい。
- (28) 「町方書上」。天保一三（一八四二）年には、「花火元方渡世」で「重立候花火屋」としても登場する（『江戸町触集成』一四巻、一三六三四、一三九三三）。
- (29) ⑤内藤銀市郎については、延享三（一七四七）年二月に米などを積んだ「内藤銀市郎様御米船」が小名浜から出港し、高波のため水戸領磯浜に避難して積荷を下ろしたという記事が確認でき（『茨城県水産誌 第二編』茨城県水産会、一九四三年、二六一頁）、また後述するように延享沽券図の文言Aが入っていることによる。
- (30) 「港区の文化財保護」（<https://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/j/bunkazai/bunkazai.cgi?id=5388>）。このほか裏打ちには、地券発行時のものと思われる地主惣代三人・町年寄ほか五名の連名・連印と地番が記された図も使用されていた。
- (31) 町田聡氏の御指摘による。
- (32) 以下、駒込村の都市化については、岩淵「江戸武家地の研究」Ⅰ第一章「塙書房、二〇〇四年、初出は一九九六年」参照。
- (33) 内閣文庫史籍叢刊第四巻『新令句解 蠹餘一得（一）』〔汲古書院、一九八一年〕、

- 二〇七頁。『本郷區史』〔臨川書店、一九八五年復刊〕。一般によく知られている「本郷も兼安〔現本郷三丁目の商家 筆者註 までは江戸の内〕」という言葉は、不正確なものといえよう。
- (34) 前掲岩淵「駒込追分町の空間と住民」。
- (35) 寛保元年七月『万世町鑑』〔「江戸町鑑集成」第一巻、東京堂出版、一九八九年、七七頁〕。延享三（一七四六）年版より宝暦七（一七五七）年版の間に大円寺門前と正行寺門前が加えられている〔同前書所収〕。
- (36) 「町方書上」。前掲岩淵『江戸武家地の研究』I第一章。
- (37) 前掲岩淵『江戸武家地の研究』I第一章。
- (38) ただし抱屋敷に関してはそのまま屋敷守として農業に従事しているものもあったであろう。また、田畑を引き続き所持している者もいたと思われる。この点は検討課題としたい。
- (39) 「町方書上」・「寺社備考」所収根津権現の項の氏子町の構成による。九軒屋敷も祭礼では「片町」として参加しており、両者の生活レベルでの一体性がうかがわれる。各組の位置関係は不明であるが、「町方書上」駒込片町の項では、竹町のうち浅嘉町に隣接している所を横町としていることから、最北端の町は竹町横町と推定される。
- (40) 高崎屋長右衛門については、岩淵「江戸住大商人の肖像」〔「新しい近世史」3、新人物往来社、一九九六年〕、同「江戸・東京の酒・醤油流通―生産者から消費者へ」〔「高梨家と醤油醸造」、慶應義塾大学出版会、二〇一六年〕参照。
- (41) 前掲岩淵『江戸武家地の研究』I第一章。
- (42) 『新訂寛政重修諸家譜』第二三巻、統群書類従完成会、一九六六年。〔御府内備考』第二巻、雄山閣、一九五八年、二四一―二四三頁。前者のみ「箕浦寿玄」となっているが、同一人物であろう。
- (43) 東京都公文書館所蔵。データの詳細は前掲岩淵「延享元（一七四四）年「万町沽券絵図控」の検討」を参照。
- (44) 町会所貸付金の未返済で取り上げられた屋敷で、近代の東京会議所に引き継がれた町屋敷をいう。
- (45) 前註40参照。
- (46) 岩淵「江戸の都市空間と住民」〔「日本の時代史15 元禄の社会と文化」、吉川弘文館、二〇〇三年〕。
- (47) 前掲野本淳「日本橋通二丁目新道、式部小路」とその周辺。
- (48) 慶長・元和期の江戸の風俗・風景などを記したといわれる「慶長見聞集」巻六では、江戸通町で一寸の境界線をめぐって争う例があげられている〔「江戸町境論の事」〕。
- (49) この点については、コメンターとして参加した江戸遺跡研究会第二九回大会「江戸の町人地2―遺跡から見る近世都市江戸―」（二〇一六年一月開催）において示唆を受け、コメントした。
- (50) 渡辺理絵「都市管理のための絵図―水帳・沽券図・城下絵図」〔「絵図学入門」、東京大学出版会、二〇一二年〕。
- （学習院女子大学国際文化交流学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）  
（二〇一六年一月二五日受付、二〇一六年五月三〇日審査終了）